

小學校教科用書



尋常小學讀本

明治二十年五月文部省編輯局

明治二十年四月廿九日版權所有局

文部省總務局圖書課發版

此書籍ハ賣捌入ノ手ヲ離ル、トキ何等ノ名義ヲ附スルモ定價ニ超過セム金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ

定價金七錢

東京市京橋區東區二丁目廿二番地
發賣所 大日本圖書敎社
大坂市東區上飯田町七十一番地
發賣所 全支社

凡例

- 一、本書は明治二十年出版、文部省編、同省總務局圖書課藏版の和裝本を原本として使用した。全七卷をすべて本書に入れた。
- 一、原本にあるすべてのさし繪は縮小してなるべく原本に近いところに入れた。
- 一、漢字はなるべく原本に近い當用漢字体又は舊漢字体を用いた。平かなのうち異体の文字は現字体に改めた。

尋常小學讀本

緒言

一此書ハ、曩ニ本局ニ於テ編輯セル讀書入門ニ次ギ、尋常小學科第一年ノ半ヨリ、第四年ノ末ニ至ルノ間、兒童ニ讀書ヲ敎フルノ用ニ供センガ爲メ、編纂セルモノニシテ、全部通ジテ七冊トス。

一此書ニ選擇セル材料ハ、兒童ノ心情ニ恰當シテ、解シ易ク學ビ易ク、且快味ヲ有スルモノニシテ、知ラズ識ラズ、其品性ヲ涵養陶造スルニ適ス可キモノヲ取レリ。

一此書ノ文體ハ、最初ニ談話體ヲ用ヒ、漸次ニ進ミテ文章體ニ移リ、以テ目下普通ノ漢字交リ文ヲ了解スルニ至ラシム。漢字ハ、其用最モ廣キ者ノ中ニ就テ、大凡二千字ヲ選ビテ、之ヲ全部中ニ編入シ、成ル可キタケ、簡畫ノ者ヨリ、漸漸繁畫ノモノニ及ボセリ。

尋常小學讀本

一此書第一卷ハ、兒童ノ遊戲、或ハ昔話等ノ如キ、意義ノ解シ易ク、趣味ノ覺リ易キモノヲ選ビ、成ルベキタケ、一地方ノ方言ト、鄙野ニ涉レルモノトヲ除キ、談話體ノ言辭ヲ以テ之ヲ記シタリ。又漢字ハ、成ルベキタケ、字畫ノ少クシテ、其用ノ普通ナルモノヲ用ヒ、且其記憶ヲ牢クセンガタメニ、前課ニ用ヒタル漢字ハ、必ズ後課ニ複出シテ、其練習ノ用ニ供シタリ。

一第二卷、第三卷ニ至リテハ、簡短平易ナル文章體ヲ以テ之ヲ記シ、漢字モ亦漸ク其數ヲ増加スト雖トモ、其文字ノ練習ハ稍緊要ナラザルガ故ニ、必ズシモ之ヲ後課ニ複出セズ、唯記述ノ事柄ヲ選ビ、遊戲ノ話ニ雜フルニ、諺、考ヘ物、庶物ノ話、其他養氣ニ資ス可キ古人ノ行實等ヲ以テシ、第四卷、第五卷ニ至リテハ、文章モ稍長キ者ヲ載セ、地理歴史ノ事實ヲ加ヘ、第六卷、第七卷ニ至リテハ、學術上ノ事項ヨリ、農工商ノ職業ニ關スル事項ヲモ加ヘタリ。但毎卷皆新ニ敎フル漢字ハ、毎課ノ末ニ摘書シテ敎授ノ便ニ供セリ。

一此書ハ、本局ニ於テ編纂シ、本省特ニ設クル所ノ審査委員ノ審査ニ附シ、文部大臣ノ裁定ヲ經テ、成レルモノナリ。

明治二十年

文部省編輯局

尋常小學讀本卷之一

第一課

あのひとは、いぬをつれてきます。
あの人は、大きな人では、ありませんか。
あの犬は、わたくしの犬よ、ちひさい犬であります。
あの小さい犬は、この大きな犬にまかせよう。



第二課

あの木の上に、大きなとりがゐます。あれは、からすであります。アレ、ごらんなされ、下のえだには、小さいのがゐます。
からすは、いたづらなとりであります。石をなげてやりませうか。



木上 下 石

第三課

こゝに、大きなうめの木があります。ふたりの女の子は、その下の石の上にて、ぼんを見つめてゐました。うめが一つ、本の上におちました。
ふたりは、おどろいて、上を見れば、そこの子が、木にのぼりてゐました。そしてうめは、この子が、とりそこなうて、おとしたのであります。



女子 見 本

第四課

は、さま、此本のゑをごらんなされ。としとりた女のそばに、きんときが、まさかりを持ちて、くまにのりてゐます。
きんときは、つよさうな子



であります。どのくらゐ、力がありますか。
わたくしは、刀を持ちて、うちのくろのり、そしてきんときと、力くらべをして、みたいとおもひます。

此持 力 刀

第五課

こゝに、六人の子どもがゐます。太郎は、刀を持ちて、大しやうとなり、三郎四郎五郎は、ぼうをかついで、兵たいとなりました。
此兵たいは、よくそろつてならんでゐます。
らつばを吹くのは、力三で、たいこをうつのは、二郎であります。
此兵たいは、みなつよくて、よく大しやうのがうれしいどほりにすゝみます。



第六課

ますぐにたてよ、正しくむけよ、左を見るなよ、右をもみるなよ。

かしらをまげず、むねをばいだし、ちかよりすぎず、ほどよくならべ。
ゆだんをするな、がうれい、まもれ、足なみそろへ、しづかにあゆめ。

正 左 右 足

第七課

太郎は、いま犬にむかうて、手をうちながら、
「ますぐに立てよ、正しく向けよ、左を見るなよ、右をも見るなよ」とうたうてゐます。
そのあひだ、犬は、あと足で立ちてゐます。太郎が、くちぶえを吹きますと、
犬は、兵たいのやうに、よくそのがうれいをきゝます。
犬は、今になにか、ほうびをもらうてあります。



手 立 向 今

第八課

あるひ、小太郎は、父に向ひ、「とゝさ

子猫よ、早くおや猫のいふことをきけ。
 きかぬと、はたきでたゝかるゝぞ。

花目居早

第十一課

ひさしふりにあめがやみ、あさ日がさして、
 木の枝には、つゆがびかくひかりて
 居ます。アレあそこに、にじがでました。
 早くみな目をさまし、お
 きて来てごらんなされ。
 くさは、めをだし、色々
 の花がうつくしくさきかけま
 した。

小とりは、又うれしうに
 さへぶりながら、枝のあひ
 だをとびまはりて居ます。
 二郎も三郎も、みな来まし
 たか。これから、つみくさにゆきませう。

日枝色又

第十二課

ある日、太郎は、をちよりふえをもらひ、
 二郎は、又たいこをもらひました。
 今太郎も二郎も、兵たいのばうしをか



ぶりに居ます。太郎のばうしは、あか
 で、二郎のは、あを
 であります。此ふたり
 のばうしは、母が、
 紙にて、こしらへたの
 であります。二郎は、
 木の枝にて、たいこ
 のばちを作りました。そして、太郎が、
 ふえを吹きますと、二郎は、たいこを
 打ちて、兵たいあそびをいたします。

母紙作打

第十三課

かみのばうしに、紙のはた、竹にて作
 りしけんを持ち、
 われこそ日本の大しやうと、太郎は、い
 くさにすみ行く。
 おくのひとまにおしよせて、「すゝめやすゝ
 め、ものどもよ。てきのぢんやにせめい
 りて、手あたりしだい、うちとれ」と、
 大おんあげて、叫びつゝ、
 むしや人形の大しやうを
 あひてに、たゝかひ居たりしが、つひにとり



ま、わたくしは、今きつねを見てきまし
 た。その狐は、ちやうど
 となりのあかのやうで、
 尾は太く、かしらはち
 ひさく、口さきとみゝと
 が、とがりてみました。」
 父は、小太郎に、「狐は、ま
 ことにわるがしいけだも
 ので、たびくかひとりをぬすむものだ」
 とをしへました。

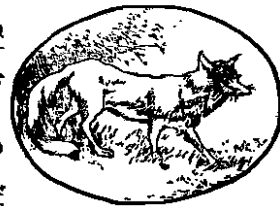
小太郎は、「と、さま、こんど狐がきたなら
 ば、手どりにしてやりたいとおもひます」
 といひました。

父狐尾口

第九課

あるひ、猫が、もりのなかにて狐に
 あひ、ていねい
 にあいさつしま
 した。

狐は、耳を立て
 て、尾をふりながら、
 「おまへには、何ぞげ



いがあるか」とたづねました。
 猫は、「イエ、わたくしは、何もできませぬ」
 とこたへますと、狐は、わらうて、「オ、
 げいなしよ、犬がきたらばどうするぞ」
 とわる口をいひました。
 そのとき、ちやうどかり犬が来たゆゑ、猫
 は、いそいで木に上りました。狐は、あ
 ちこちとにげて見たれど、つひに犬に
 とられました。

猫耳何来

第十課

お花は、はたきにて、しやうじをはらうて
 りました。子猫は、かけ來り、耳を立て、
 目をまろくして、ねらうてゐます。そして
 お花が、はたきをう
 ごかすたびに、とびつ
 きます。

おやねこは、ふとんの
 上に居ながら、「おまへ
 は、何をすののだ。
 お花さまの、おじやまになるぞ。そちら
 のまりをころがしてあそべ。」



ここにしたりけり。

竹 行 叫 人 形

第十四課

二郎は、じぶんにて作りたる舟を持ち、お竹は、母よりもらつたる人形を持ち、池へあそびに行きました。その舟は、ほかけ舟にて、日のまるのはたが立て、あります。



ふたりは、人形をのせて、舟を池にうかべました。しばらくすると、舟は、岩にあたりに、なかに水がはひりました。

「アラ、人形がしづむよ」と、お竹は、叫びました。そこで、二郎は、すぐにぼうにて、舟をかきよせ、人形をあげてやりました。

舟 池 岩 水

第十五課

二郎さん、ごらんなされ、此池に、たくさんうをがゐます。お竹さん、私がつりて見ませう。

つることは、およしなされ。

このうをは、よくなれて、舟をこいでも、又手を水に入れても、にげませぬ。アレ、今おぼきののが、ういて来て、手をつきます。大かたゑと思ふのでござりませう。

お竹さん、私も手を入れ、あ、岩の下にかくれました。うをや、つりはせぬぞ、早く出て手をつつけ。



私 入 思 出

第十六課

子ねずみ、母のもとに來て、「今私は、よいところを見つけた。」

「其入口は、ちやうどよい大ききで、猫にははひれませぬ。又其中には、もちやうをのほねなどがあり、よいにほひがします。」



「私は、すぐはひらうと思ひましたが、母さまに、知らせにまゐりました。早く、あそこへ行って住みませう。」

ねずみの母は、「オ、それは、わなといふもので、一どはひると出ることで、おまへは、よくきくに來た。知らぬことをきかずにすると、とんだ目にあひますぞ。」

其 中 知 住

第十七課

ありは、地に穴をほりて、其中に住みます。

ある日、穴の中が、きふにくらくなりた故、ありが出て見ると、いも虫がねてゐました。



「こゝは、入口でござります、どうぞのいて下され」とたのみました。がきませぬ。ありは、はらを立て、「それなら、からだをくひやぶりに、穴をあけて、とほるがよいか」といひました。

いも虫は、このありが、小さいくせに、何をいふかと、知らぬふりをしてゐました。

そこで、二三びきのありが、はらにくひ付きたれば、いも虫は、おどろいてころげまはりたれど、ありははなさず、つひにはらをくひやぶりました。

地 穴 故 虫 付

第十八課

こゝに、二郎と三郎とがかきを取りて居ます。二郎は、柿の木の上から、三郎、此柿をうけてごらん。」

三郎は、「受けますから、一二三とかぞへて、三つめにおなげなされ。」

二郎は、「一二三」とよびながら、柿をなげたれば、地に落ちて、つぶれてしまひました。それは、虫の付いた柿でありました。



「あにさん、こんどは、ばうしの中へ受

ずにはできぬものだ
此間 せんせいから ききま
した。もし 落さるゝとい
けませぬ から、私は 乗りま
せぬ。」



太郎は、力三に、あの馬
の にぶい ことは、私が
知りぬいて 居ます。決して 恐るる ことは有
りませぬ、初めての 人 にも 乗れます。力
さんが いやなら、二郎と 一しよに 乗ら
う」と みちばたの 石を ふみだいに して、
乗りました。

馬 乗 落 決 恐

第三十三課

太郎は、「吾等 二人は、乗りたるぞ。サア、
一かけ かけて 見よ」と云うたれど、馬は、
少しも うごきませぬ。そこで、しきりに つ
なを 引いたれば、馬は、だん／＼ あとへ
行きます。

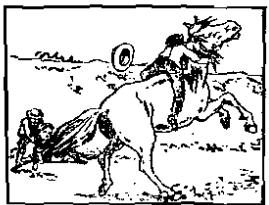
「兄さん、決して 恐るゝには およびませぬ」

日本は、じこうもよく、地もよい故、
米 茶 などがよくでき、又 きれいともた
くさんに 取れます。

日本には、むかしより、かしい人、つよい
人、其 外 名高い 人が、たくさんに あり
ました。みなさん、がくかうにて、色々
のことを 習ひ、ちゑを みがき、からだ
をつよくし、よき 人にならねば なりませぬ。

千 百 万 東京 天 米 茶

と云ひながら、二郎は、
持ちて 居たる ぼうを ふり
あげて、馬を 打ちました。
馬は、きふに かけ出し
はねまはりて、二人は、誠
に 困りました。



吾等 引 誠 困

第三十四課

吾等 がうまれた 日本は、誠によいに
で、其 人かずは、三千七百万
ほどで 有ります。
みやこを 東京と云ひ、
こゝが 天子さまの
お住みなさるゝところ
にて、大きく にぎやかなる
ことは、日本一で あります。



尋常小學讀本卷之二

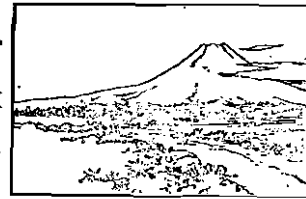
目次

- 學校 咲け花よ
- 妹の姉を しんせつ にする 話
- 猿とかに との 話 (二章)
- 人形の 舟遊び かたつぶり 時計 (一章)
- はなれ馬
- 心は たけくの うた
- 富士山 考へ物 食物
- 子を あいする 猫の 話
- 紙 小猫の 話
- 慾 深き 犬の 話
- 兵士 新聞賣
- 海岸の 遊び (二章)
- 八町二郎の 話
- 日の 出
- たかねの 歌 方角
- 舟遊び 山びこ
- かすみ か雲かの 歌

おくれず すゝめ 子供等よ。
出あへる ときに、恐れぬ 人を。
ものゝふ としも 云ふぞ かし。

第十三課

富士山



富士山は、わがくににて、一ばん 名高き 山なり。此山は、いづこ よりも、同じやうなる すがたに見え、其形は、すりばちをふせたる やうなり。昔は、其ちやう上より、火や煙を吹き出せり。されど今は、火も煙もたえ、ちやう上の雪は、年中とくること無し。

富士 昔 烟 我 國 歌

第十四課

考へ物

ある日、太郎は、力三にむかひて、一つの考へ物を出したり。「今私が、戸棚を

あけますと、はこれの中に、ひとりごとをいうて居るものがありました。」

「私の形は、皆さんのおつかひなさる筆に似てゐます。私は、ふだん白いきものをきて居ます。しかし、日がくれますと、人さんが、私をさしきのまなかに持ち出し、だいの上に立たせて、赤色のぼうしを被らせます。私は、手も足もなくて、立ちて居ます。其立ちて居ます時が長ければ、長い程、せいが短くなりま

す。其時人さんは、私と同じ物を持ちて来て、私のせいを「つぎたします」と。太郎「これは、何でありますか。」力三「私には、分りませぬ。」

吾等は、力三に代りて 考へ見ん。

第十五課

食物

人は、食ふために、生きて居るにあらずして、生きて居るために、食ふと云ふことをわするべからず。人の食物は、こくもつ、野菜、くだもの、および肉なる

どなり。

こくもつとは、米、むぎ、あ

はなどの たぐひにして、

野菜とは、だいこん、かぶら

の たぐひ、くだもの

とは、桃、柿、なし

の たぐひを云ふな

り。又肉あるとは、

牛肉、豚肉、魚肉な

どの たぐひなり。

しほは、人の食物に、大かた まぜもちふる

物にて、うみ又は山より取るなり。

又茶は、茶の木のはにて、こしらふる

物にして、さたうは、おもに、さたうきび

より取る物なり。

食 菜 肉 牛 豚 魚

第十六課

子 を あいする 猫 の 話

こまと云へる猫あり。三疋の子を生

み、えんの下にてそだて居たり。

或る日、此えんの下しめりし故、こまは、

子猫を、其上なるしもべの部屋に、



うつさんとせり。よりて、えりくびをくはへて、階子を上り、やうやく三疋をはこびたり。

しもべは、これを見付け、「こまや、子猫をこゝにつれて来ては、困るぞ」と

云ひて、もとの所へもどしたり。

されどこまは、又口にくはへて、はこび

来りし故に、しもべは、又これをもど

したり。

かくはこびては、もどさるゝこと、五六度

になりしかば、こまは、つかれて、いづこ

へか立ち去れり。こまは、子猫をのこした

るまゝ、ふたゝびかへらざりしか。否、大

なるくる猫ととも、かへり来れり。

此くる猫は、こまの子猫をくはへ、こま

のあんないにて、

階子を上りて、部

屋に入り来れり。

しもべは、かくまで

に、こまの、心

を苦むるを見て、

子猫をおくこと



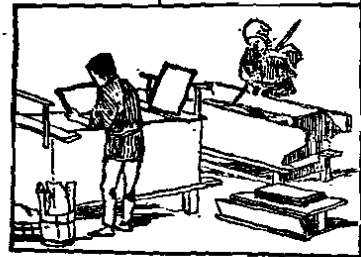
をゆるしやりたり。故にこまは、大に喜び、くろ猫もまた喜びて立ち去れり。

部屋 階子 否 苦

第十七課

紙

吾等が、よみ居る本の紙は、楮の皮にて、すぎたるものなり。楮は、山、はたけ又は田のくろにうゑる物にて、高さは、五六尺位迄、そだつものなり。



紙をこしらふるには、まづ楮をきり、かまにてむし、其皮をはぎ、これを水にてさらし、又煮などして、十分白くするなり。其後、それを石臼にてつきくだきて、水にかきまはし、又米のこと、

とろゝあふひの根のしるをくはふ。此まぜたるしるを、紙すきすだれにてすぎ、いたにはりて、かわかしたるものは、すなはち紙なり。此紙を、半分にきりたるものを、半紙とは云ふなり。

楮皮田尺煮根半

第十八課

小猫の話

お時は、小猫をかごに入れ、お竹の家に持ち行けり。

「お竹さん、私の持ちて来たものを、あてゝごらんなされ。」

「ハイ、あてゝ見ませう。人形でありますか。」

「イ、エ。」

「花でありますか。」

「イ、エ。」

「とりでありますか。」

「イ、エ。」

「兎でありますか。」

「イ、エ。」

丁度其時、小さきこゑにて、ニヤーとなきたり。



「ア、猫で有りませう。」

「ハイ、先程、庭の松の木の下に、居ましたのでありますが、あなたにあげやうと思つて、連れて来ました。」

「お見せ下され、オ、美しくしいい猫であります。誠にありがたう。私は、此猫をかはゆかりてやりませう。」

お竹は、此小猫を玉と名づけ、しんせつにあつかひし故、玉は、直にお竹になれたり。

兎先松連美玉

第十九課

慾ふかき犬の話

一疋の犬、一きれの肉をくはへて、已が家にかへらんとせり。みちにて、

一つのはし

をわたらんと

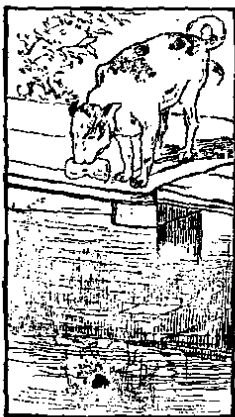
せしに、其下

に一疋の

犬ありて、又

一きれの肉

をくはへ居るやうに見えたり。



其時、此慾深き犬は、いかなること、をなしたるぞ。

此犬は、彼の犬と争ひて、其肉をもうばひ取らんと思ひ、彼の犬に吠えかけた。

しかし、口を開くや否や、已が口にくはへたる肉は、たちまち小川に落ちて、見る見る深く沈み行き、下の犬のくはへたる肉もまたきえうせたり。これは、さきに、まことの犬のやうに見えしは、已が形の、水にうつりたるものなりし故なり。

かくして、此慾深き犬は、つひに一きれをも食ひえざりき。

慾深已彼争吠沈

第二十課

兵士

兵士は、國のために、てきとたゝかひて、吾等を守り、二つなき命をも、をしまぬものなれば、つねにたふとみうやまふべし。

吾等、今は小兒なれども、二十歳に至る時は、皆兵士となりて、今の兵士に

をゆるしやりたり。故にこまは、大に喜び、くろ猫もまた喜びて立ち去れり。

部屋 階子 否 苦

第十七課

紙

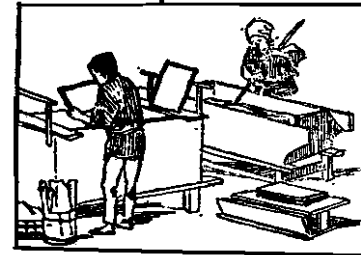
吾等が、よみ居る本の紙は、楮の皮にて、すぎたるものなり。楮は、山、はたけ又は田のくろにうゑる物にて、高さは、五六尺位迄、そだつものなり。



紙をこしらふるには、

まづ楮をきり、かまにてむし、其皮をはぎ、これを水

にてさらし、又煮などして、十分白くするなり。其後、それを石臼にてつきくだきて、水にかきまはし、又米のこと、



とろゝあふひの根のしるをくはふ。此まぜたるしるを、紙すきすだれにてすぎ、いたにはりて、かわかしたるものは、すなはち紙なり。此紙を、半分にきりたるものを、半紙とは云ふなり。

楮皮田尺煮根半

第十八課

小猫の話

お時は、小猫をかごに入れ、お竹の家に持ち行けり。

「お竹さん、私の持ちて来たものを、あてゝごらんなされ。」

「ハイ、あてゝ見ませう。人形でありますか。」

「イ、エ。」

「花でありますか。」

「イ、エ。」

「とりでありますか。」

「イ、エ。」

「兎でありますか。」

「イ、エ。」

丁度其時、小さきこゑにて、ニヤーとなきたり。



「ア、猫で有りませう。」

「ハイ、先程、庭の松の木の下に、居ましたのでありますが、あなたにあげやうと思つて、連れて來ました。」

「お見せ下され、オ、美くしいよい猫であります。誠にありがたう。私は、此猫をかはゆがりてやりませう。」

お竹は、此小猫を玉と名づけ、しんせつにあつかひし故、玉は、直にお竹になれたり。

兎先松連美玉

第十九課

慾ふかき犬の話

一疋の犬、一きれの肉をくはへて、已が家にかへらんとせり。みちにて、

一つのはし

をわたらんと

せしに、其下

に一疋の

犬ありて、又

一きれの肉

をくはへ居るやうに見えたり。



其時、此慾深き犬は、いかなること

をなしたるぞ。

此犬は、彼の犬と争ひて、其肉をもうばひ取らんと思ひ、彼の犬に吠えかけたり。

しかし、口を開くや否や、已が口にくはへたる肉は、たちまち小川に落ちて、見る見る深く沈み行き、下の犬のくはへたる肉もまたきえうせたり。これは、さきに、まことの犬のやうに見えしは、已が形の、水にうつりたるものなりし故なり。

かくして、此慾深き犬は、つひに一きれをも食ひえざりき。

慾深已彼争吠沈

第二十課

兵士

兵士は、國のために、てきとたゝかひて、吾等を守り、二つなき命をも、をしまぬものなれば、つねにたふとみうやまふべし。

吾等、今は小兒なれども、二十歳に至る時は、皆兵士となりて、今の兵士に

第二十二課
新聞賣 買 汝 毎 飯 黒
海岸の あそび 一
ある あつき 日、太郎 二郎の 父は、ふたり
を 伴ひて、すゞしき 海岸
に行けり。
此 海岸 には、ひろき 砂地
ありて、珍しき 貝がら や、
きれいな 小石 あり。太
郎等は、喜びて之を拾
へり。
父は、ふたりを小舟に

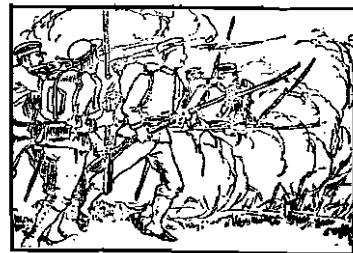


第二十三課
海岸の あそび 二
二郎は、父の 釣りたる かにを見て、思ひ
出し、「兄さん、私は、
いつか 母さまと、博物館
に行きて、六尺ばかり
ある かにを見ました。あ
れは、海に 居る、一ば
ん 大きなものと思ひま
す。」
太郎は、これにこたへて、
「二郎、まだ 其れより、大きなものが
あるよ。私は、一丈程もある、大
まぐろを見ました。」



夜 いたします。」
「早や、九時にちかくなりました故、急ぎ
て、のこりを 買らねば なりませぬ、學校へ
行くの が おくれると、黒てんをつけら
れます。」
此 としよりは、前の はなしを聞きて、大
にかんしんし、「よき子よ、汝は、後に
かしこき人になるべし、早く學校に
行けよ」とて、のこりの新聞を皆買ひ
もとめたり。

何か 惜まん、惜まじと、
大づゝ小づゝ 打ちたつる、
煙の中をくぐりぬけ、
われ おとらじとすゝみ行く。
向ふところは、くろがねの
しろの 門をも 打ち破り、
向ふところは、むらがるる
人の 山をも かけくつし、
其いきほひは、やいばもて、
あだかも 竹をわる 如し。
げに 勇ましきは、兵士 なり。
守 命 小兒 至 勇 惜 破



代り、勇ましくわが國
を守らん。
げに 勇ましきは、兵士
なり。
よせくる ときのある
時は、
わが日の本の國
のため、
おのが家をも、命

第二十一課
新聞賣
十二三さいなる 新聞賣 あり。手に、色々の
新聞紙を持ちて、「新聞や新聞」とよびあ
るけり。此子のきものは、あちこち破
れ、足ははだしなり。
或る年おいたる人、此子をあはれみ、よ
びとめて、其新聞紙を買ひたり。そして、
「汝は、年も行かざるに、何故、新聞
を賣るぞ」とたづねしに、次のごとく
こたへたり。
「私は、父をうし
なひ、母と二人
にて、まづしくくら
します故、私は、
新聞を賣りて、紙
や筆を買はねばなりませぬ。」
「私は、毎朝早く起きて、新聞を買ひこみ、
朝飯をしまうた後に、二時間新聞を
賣り、それから學校へまゐります。」
「私は、ひるまは、色々のようじが有り
て、いそがしき故、したよみさらひなどは、



霞は、はなをへだつれど、
へだてぬ友と、来て見るばかり
嬉しきことは、世にもなし。

霞みて それと、見えねども、
鳴く うぐひすに さそはれつゝも、
いつしか 來ぬる、花のかげ。

鳥唱霞友嬉世鳴

尋常小學讀本卷之二終

尋常小學讀本卷之三

目次

正直もの	まこと	かひこ
二郎のおもちやを染めたる話(二章)		
米		
道長の話		(二章)
おきよと正雄との話		
めくら	塙保巳一の話	
次郎と三郎との話		
九年母の話	はりねずみ	
正作病氣になりし話		
ほねをしみせし馬の話		
正雄の正直馬		
馬の童を助けし話		
四季	酒井忠勝の話	
作太郎の鳩	作太郎の手紙	
桑つみ女	招魂社	
行成と實方との話		
かうまんなる男	虎と狐との話	
燕		
燕の巢を奪ひし雀の話		

尋常小學讀本卷之三

第一課

正直もの
松平 丹後守 といふ 大名に、つかへたる 小
坊主 有り。ある 朝、さうぢをしながら、
箒にて やりをつかふまねを なしゝに、
あやまりて、丹後守が、ひさりの 松の 枝
を 打ち折りたり。

小坊主 は、大に くい、此事、丹後守に



かたへに ありし 人々は、小坊主の 折りし
を見たれど、かれが とがめられん こと を
あはれみ、何の 答をも なさざりしに、小

坊主は、恐るゝ すゝみいで、「私が、や
りをつかふまねをいたし、つい 折りまし
て「ござります」と有のまゝに まうしたり。
丹後守は、「にくきやつ かな」と其まゝ おくへ
入られたり。されど、又 小坊主の 正直なる
を かんしんせられ、其後 小坊主を よび出し、
はをりをぬきて、あたへられたりといふ。

松平 丹後守 坊主 箒 折

第二課

まこと

詐云はず、あざむかず、

誠の道を守るべし。

心を安く持たんには、

誠の道を守るべし。

月日たのしく、過ぎんには、

誠の道を守るべし。

けふもあしたもかはりなく、

誠の道を守るべし。

如何なることに、あふとても、

誠の道を守るべし。

ゆめこの掟、忘れずて、

誠の道を守るべし。

詐道安月、過從忘
第三課

かひこ

かひこは、蛾の卵よりかへりて、小さきは
だか虫となり、桑のはを食ひて成長す。
十分成長して、はや桑のはをくはぬや
うになるときは、口

より糸を出す。
かく糸を出す
は、まゆとよ
べる巢をつく
るためなり。

かひこは、此巢
の中にこもり
て、凡そ十三

日間眠るものなり。その眠さむる時は、
蛾となり、まゆを破りて出づ。

此まゆより糸を取りて、絹におり、衣
服などをつくる。かひこ、もし蛾とな
りて、まゆを破りて出づるときは、糸
は、きれ／＼になる故に、糸を取る
には、蛾とならざるやうにするなり。



此まゆより取る生糸は、我が國の産物
中にて、甚だ大切なる物なり。

第四課

二郎のおもちやを染めたる話 一
母は、二郎に、繪具一はこと おもちや
とをあたへたり。繪具はこには、赤青

黄の三色ありて、おもちやは、紙にて
きりたる、鳥花木柿 柚子の五つなり。

二郎は、此繪具とお

もちやとをもち、何
かかんがへて居たりしが、

赤き繪具にて、花を
染めたるに、美しくしき
花となりたり。

二郎は喜び、次は青

色にて鳥を染め、

黄色にて柿を染めたり。

されど二郎は、青赤黄の外に、繪具
を持たざれば、木を染むる色を考へ付か
ざりき。それ故に、二郎は、母に、今
一色の繪具を求めたり。



母は、二郎に、「黄と青とをまぜて見

よ、木を染むるに、よい色が出来るな
らん」と云へり。二郎は、直に、母の
云ひしとほりになしたるに、美しくしき緑色
となりしかば、二郎は大に喜び、木を
染むるには、これがよき色と思ひたり、

第五課
染繪具 青黄 柚子 求緑

二郎のおもちやを染めたる話 二
次の日、母は、二郎に向ひて、「黄と
青とをまぜると、何色になるぞ」と



問ひしに、二郎は、「緑で
あります」と答へたり。

母は、又二郎に、「黄と
赤とをまぜて見よ」と云へり。二郎は、直に、

其二色をまぜ、だいた
いのやうなる色を得
たり。母は、それを橙黄

色なりと教へ、二郎は、此色にて柚
子をそめたり。

二郎は、黄と青とをまぜて、緑をこ

第六課

問得橙末紫獨樂

しらへ、黄と赤とをまぜて、橙黄色を
こしらへたれど、未だ青と赤とをまぜざ
りし故に、其二色をまぜたるに、一つ
の美しくしき色を得たり。今二郎の得た
るは、紫色にてありき。

二郎は、喜びて、母のもとに行き、自ら
一つの色をこしらへたる事をつけ、獨
樂を持ち來りて、紫色に染め付けたりとぞ。

吾等の食する米は、一方ならぬほねをり
にて、つくりたるものなり。されば、たとへ

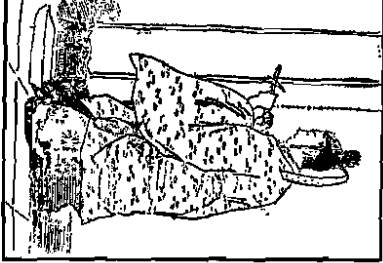
一つぶにても、そまつになすべからず。
米には、梗と糯と

あり。梗は飯に炊

き、糯は、こはめし
とし、又もちにつ

く。
此等の米は、多く
水田に作れる稻に
みゐるものなり。





内、其、肩を削
り、其、肩を削
つらひたまひたり。やがて道長は、大極殿の

道長は、御前をしりぞきて、さびしき眞夜中
を物ともせず、直に大極殿へ、出で行き
ぬ。此時、道長の兄、一人にも、また
他の處へ行けとおほせられしが、皆行
くべきところ迄は、行き得ずして、中途よ
り歸れり。然るに、道長は、久しく歸り
來らざりしかば、いかならんとおほしめしわ
づらひたまひたり。

道長の話 二

第八課

道長 皇御侍 畏申 大極殿

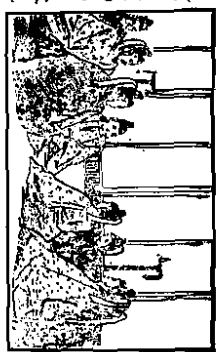
よ」とおほせられぬ。人々は、かほの色
青ざめて、よし無きこと申上げたりと思へ
り。されど、道長一人は、心に畏るゝ所
なければ、少しも氣色かはらざりき。

道長の話 一

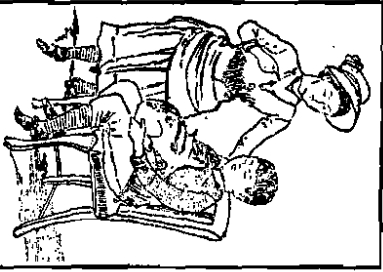
第七課

梗 糯炊 稻 苗 寸 植 草 梗

稻の種を時くところを苗代田と云ふ。
本田に植ゑし後は、しばし草を取りて、
稻の成長を助く。稻のほの出でし
後は、水を落してしだいにかわかす
なり。
稻のほ、十分にゆくしたる時は、之を
かりて四五日ほし、稻こきに、ほを
こき落し、こくふるひにてふるひ、又たうみ
にかけて、實としひなとを分つ、この
實を梗といふ。この梗をむしるに
ひろげ、よく日にほし、それをすりうす
にてひき、ふたゝびたうみにかけて、もみが
らを去り、やうやくに米を得。
此米を、臼にてつきしらげ、ぬかをさり、
はじめて、飯に炊きて、食することを得る
なり。



時に、天皇、人々におほせて、畏ろしき話
をなさしめたまふ。此時代の人は、世
にばけ物などのあることを信じたれば、
皆々恐るゝことかぎりなし。
天皇、「かく多くの人、あつまり居てさへ、
さびしくおほゆるに、人なき所は、如何
ならん。此人々の中にて、たれぞ左や
うの所へ、行き得る
者あるや」とはせ
たまへり。
御前の人々、皆かほ
見合せて、たれ一人も、
まあらんと答へし人
なかりき。しかるに道
長は、「いづこなりと
も、おほせにしたかひ
てまゐるべし」と
天皇、「それは面白し、
たゞちに大極殿へ行け



おきよと正雄との話
「正雄おいで、お前は、盲になり、私は
お前の先生になりて遊びませう。」
「姉さん、それは、面白うござりませう」と
正雄は、こしかけにかゝりて、目を閉ぢ
たり。
おきよは、正雄のひざに、一つの物を
おき、「盲の子よ、これは、何か。」
正雄は、手にて探りながら、「先生、これは、
鬼でありますか。」
「さやう、鬼は、
どんなけもので
ありますか。」
「鬼の毛はや
はらかで、頭は二
は、長き耳二

第九課
眞他處 歸柱 削屑 押
云ふ。
來よ」とおほせられたり。其人かしてまり、
大極殿に行きて、削り屑を押しあて、見し
に、柱の削りあとに、よく合ひたりと

に さわぎしかど、 遂に 出づる ことを 得ざ
りしとぞ。
すべて、 自ら 骨折る ことを なさずして、 他 の
物 を うばはんと する もの は、 此 雀 の
如く、 うき目 に あふ もの なり。
軒 泥 巧 乞 呼 集 運 骨

尋常小學讀本卷之三終

月 の 日 數
鹿 の 水 鏡
ばうし花
繪 と 圖
公園 の 地圖
犬 の 智慧
大坂 の 蛙 と 京都 の 蛙
神武 天皇
紀元節 の 歌

尋常小學讀本卷之四

目次
お竹の老人を助けし話
時
學のすゝめ
忠次郎の話
友のえらび方
麻
こぶ取 (二章)
信高の妻の勇氣
千代松の話
杜鵑
烏蛤を食ふ話
考へ物
書物の讀み方
菊の歌
孝行なる盲人
子鼠とおや鼠
手紙の書き方 (二章)
義家の學問に志したる話

尋常小學讀本卷之四

第一課

お竹の老人を助けし話
道は、雪にうづもれ、風は、はたへに
透りて、寒さ甚だ強く、ゆきゝの人々は、
早く家に歸りつかんと、皆急ぎ足に歩め
り。然るに、あはれげなる一人の老人、
或る家の前に立ち、
手に扇を持ちて、
うたひをうたひ居たりし
が、やがてそこをた
ち去らんとて、あやまり
て雪の中にたふれ
たり。
お竹は、迎への人に
連れられ、妹と共に、
學校より歸り來りしが、其有様を見て、
ひとり立ち止まり、「ア、此雪に、あの
老人が、なんぎして居る」と云ひて、其
傍に進み行きたり。此老人は、盲なりし
が、人の傍に來りしを聞きつけ、何と



雀忠次郎と名づけたりとぞ。

脱 挨拶 逢 丁寧

膠 着 失敬 笑

第五課

友のえらび方

朋友とは、共に學校に行き、共にけいこをなし、又共に遊びなどする者を云ふなり。其深切にて、人を欺かざる者は、よき友にして、我が身の守となるものなれば、吾等は、つとめてよき友に交はるべし。

又人を欺き、或は人を害するものは、悪しき友なれば、吾等は、決して悪しき友と交はらざるやう心がくべし。常に、悪しき友と交はるときは、已もおのづから、悪しき風に染まりて、遂に悪人となることあり。

諺に、「朱に交はれば、赤くなる」と云ふことあり。これ朱と白き物とを、一



所に置く時は、白き物も、また赤くなるが如く、悪人と交はる時は、おのづと、悪しき風に染まると云ふ意なり。

又、「麻につるゝよもぎ」と云ふことあり。

これ、よもぎは、ひとりそだつ時は、曲りがちなるも、麻の中にて育つ時は、麻の眞直なるにつれて、自然に眞直になる云ふ意なり。

朋欺交朱意麻曲育

第六課

麻

子供の、もてあそぶ風の糸は、麻より造りたるものなり。夏の夜、蚊をふせぎて、我等を、心安く眠らしむるかやも、また麻よりおりたるものなり。

汝等、麻といへる植物を見しことありや。麻は、眞直に育ち、其高さ七八尺に



もなり、葉の形は、かへでに似て、少し大なり。

麻には、雄花の咲くものと、雌花の咲くものとあり。雄花は、うす緑をおびたる白色にて、雌花は、緑色の苞を被れり。實は、小さく、其色うす黒くして、これより油をしぼり、或は、小鳥のえとし、また人の食品ともなす。莖は、刈りたる後ほし上げて、しばくこれに水をそそぎ、其外皮のくさりたるをはぎとりて、内皮を芋とし、芋より糸をつむぎて、麻布にあり、或は、芋なはとなす。

麻 蚊 雌 苞 油

莖 苧 苧 布

第七課

こぶ取一

昔、右のほゝに、大なる瘤ある、ひとりのきこりありけり。或る日、山中にて、雨風にあひしかば、杉の木のうちにはひ入りて、はれまを待ちしが、とかくする中に、日もくれたれば、歸ることも

かなはで、そこに一夜をあかさんとせり。木こりは、さびしさおそろしさに、眠られもせず、かまじり居たるに、夜もふけたる頃、

何物かの來る音のした

れば、木こり

は、そとおもてを伺ひ見しに、きたいなる顔付のものども、多く集り來りて、その木の前に居まはり、やがて酒もりを開き、又まひをも始めたり。始めのほど



は、木こりもおそれ居たりしが、もとより好むまひの事なれば、しらずく、其拍子に浮かされて、自分も出で、まひて見んと、つひに酒もりの座へまひこみに、皆々、一時は、おどろきたる様なりしが、木こりのまひの上手なるに感じ入りて、しきりに之をほめはせり。

かくて、夜あけも近づきたれば、皆々、早や歸るべき時來れりとて、酒もりをやめ、木こりに向ひて、「汝のまひは、誠に

を噛み取らん爲めなれども、犬の齒は、甚だ不揃なる者故に、容易に、蚤を噛み取ることも能はず。

緒、こゝに、犬の蚤を除きし、珍しき話あり。ある人、一疋の犬を飼ひ置きたるに、此犬に蚤生じ、だんぐにふえ行きたり。

犬は、苦しがりて、しきりに噛み取らんと

せしが、もとより多き

蚤なれば、力及ばず、

飼主も、また如何にも

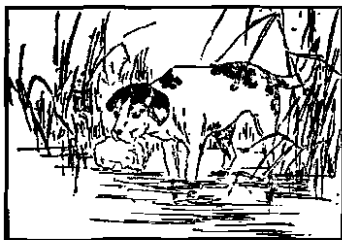
して、其蚤を取りて

やらんと思ひしかど、別

によき工夫もあらざり

き。

さる程に、此犬は、飼



主の許を立ち去りし故、飼主は、如何なる所に行くやと、あとを付けしに、二三町へだよりたる湖木に行きて、忽ち水中に飛び入りしに、蚤は、水を恐れて、上へ上へとはいひあがり、皆犬の首に集れり。

犬は、又水中より出で、一散に走り行きて、何處よりか、綿屑をくはへ來りて、再び水中に飛び入りたり。蚤は、又大の首に集りしが、犬は、深く首を水中に入れし故、蚤は、皆くはへたる綿屑に集りたり。



其時、犬は、綿屑を放したりしかば、蚤は、皆綿屑と共に、おぼれたりとぞ。

智慧噛蚤齒揃

除飼湖散

第二十八課

大坂の蛙と京都の蛙

むかし、京都に一疋の蛙住みけり。此蛙

は、都にてのきけもの

なれど、未だ大坂を見

たることなければ、其

見物を思ひ立ちて、急

に大坂に發足せり。

然るに、道に一つの

峠ありければ、辛うじて

上りしに、向ふよりも

一疋の蛙上り來れり。

よりて、雙方暫く足を止め、先づ京都の蛙、「貴殿は、旅の御様子なるが、

いづくへ行かるゝぞ」と問へり。

彼蛙は、これに答へて、「拙者は、大坂

の蛙なるが、未だ京都を見しこと無

き故、京都見物にまゐるなり。貴殿も、

旅の御様子なるが、いづくへ」と問ひ

返せり。

京都の蛙も、大坂見物のよしを答へて、

これより互に、大坂へと、京都へと

の道程を問ひ各未だ半分みちなること

を知りて大に失望せり。

暫くして、大坂の蛙は、京都の蛙に向

ひ、「此様子にては、各志す所迄行き

つくことおぼつかなし。幸こゝは、高き

處故、こゝより、京都と大坂とを、

ながめ見て歸らんは、如何に」と云ひし

に、京都の蛙も、「尤もなり」と、早速

に同意せり。

よりて、雙方の蛙、あと足にて立ち上り、

つくづくとながめながら、大坂の蛙は、

「ナニ、京都も大坂も同じことだ」と

云ひしに、京都の蛙も、「大坂も矢張り京都と同じことだ」と云ひて、おのれが目付けし所には、心付かず、互に立ち分かれたりとぞ。

蛙峠辛雙貴旅拙互志

第二十九課

神武天皇

二月十一日には、日本國中の人、皆

業を休み、家の前に、日の丸の

はたをたて、祝ひ樂む。

此日は、紀元節とて、

神武天皇の、御位に

即かせたまひし日なり。

神武天皇は、我が國第

一代の天皇なれば、

凡そ我が國に生れし

ものは、皆天皇の御

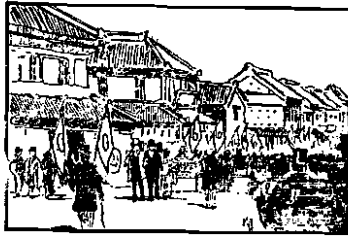
事を、能く知らざるべ

からず。天皇は、うがやふきあへずの尊の、

第四の御子にして、始め、日向の國た

かちの宮にいまして、天下を治めたま

へり。其時、西國は、はや天皇に従ひ

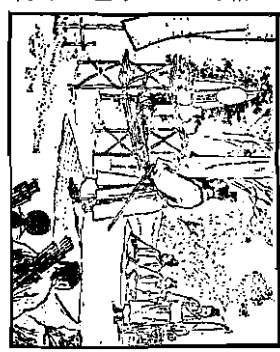


おぼしたゝして、
西のはてなる
ひんがしとして、
みいつの風に、
なびきしたがひ、
えうかしはじめ
ながすねびこも、
仰仁穂澤
第三十一課
紀元節の歌
大和の國の
都をさだめ、
ふとしきたてゝ、
のほらせたまひ、
つかさをさだめ、
續め給へば、
また波風の
國民よとび
はつ國しらす
あがめたふとみ、
わかれしごとく、

みこたちと、
ひきあまし
日向より、
いでたゝす、
草も木も、
にしきとべ
えしき等も、
亡びけり。
罪民救亡
續き
檀原に、
宮はしら
御位に、
もろくの
天の下
おほやしま、
騒ぎなし。
まつるひて、
すめらぎと
天地の
明に、

君臣の分
地球の中に、
國はあれども、
國の名おひて、
人もうらやむ、
國を建てたる
おほみいさをに、
うねびの山も、
はにやすの池も、
三千餘萬の
もとを忘れず
いはふけふこそ
いはふけふこそ
樂しけれ。
檀原 續給 驛 明 臣 建
紀元節
たのしけれ、
みくにびと、
ふかからず。
高からず、
くらべては、
すめらぎの
たくひなき
とつ國の
うらやすの
國といふ
さだまりぬ。

まつりしが、今の畿内の方には、未だ
天皇に従ひたてまつらぬものども多かりき。
されば、天皇は、このものどもを平げ、大
和の國に、都を定めんとて、多くの
軍勢を引きつれ、日向の國を出で立ちた
まへり。かくて、きびの國に來たまひて、
いくさの用意をなし、それよりふねに
て、なにはに上陸し、大和の國に向ひ
たまへり。このきびの
國とは、今のびぜん
びつちうびんと等の
土地にて、なにはとは、
今の大阪の事な
り。
大和の國には、ながす
ねびこやそたけるなど
云へるものどもありて、
皇軍にに向ひしかば、忽ちに打ちほろぼした
まひ、又つちくもと云へる、強きものども
をも打ち破りたまひ、遂に大和の國を
平げて、かしはらの宮にて、御位に即か
せたまへり。これより、代々の天皇、其



後をつぎたまひ、今上天皇に至りては、
既に百二十二代となりぬ。
神 祀 紀元節 即 凡 尊 畿 軍
第三十課
紀元節の歌
仰げやあふげ、
あらんかぎりは、
天つ御神の、
みことのまゝに、
動かぬもとゐ
神武のみかどは、
そなはりませる
みおやにゝぎの
日向の國の
宮居さだめて、
しきたまへれど、
まだうるほはぬ
國おほし。
あらそひて、
くるしむを
天業を
をしくも

尋常小學讀本卷之五

目次

學問の益

たのしわれ

菅原道真

狐と蟹とのかけくらべ

遊梯

腐りたる柿

翼の折れたる雀

小兒の惡戯

日本武尊

おもなる金屬

正雄のあうむ

いひなけ

智慧の垣

仁徳天皇

家

蠅

塞翁が馬

深切の却て不深切となりたる話(二章)

フリードリヒ大王の話

羊 魚釣
樟 虫
醜陋天皇
諺
不正直の結果
良秀の話
勉強の少年
諺

尋常小學讀本卷之五

第一課

學問の益

今日、吾等の、學校に於て學ぶことは、他日自分の爲め、又他人の爲めに、甚だ有益なることなれば、善く意を用ひて、教師の教を聞くべし。

亥太郎と云へる小兒あり、常に、「學校にて學ぶことは、何の用に立つべきぞ」と云ひて、なまけ居たり。ある日、金作と野邊に行きしに、にはかに黒雲起りて、大雨降り注ぎ、雷はげしく鳴り渡れり。

亥太郎は、大におどろきて、野中に一本

立ちたる、高き木の下ににげこみしかば、金作は、「昨日、先生が、雷の鳴る時には、決して高き木の下に行くな、と教へられしにあらずや」と話し、に

亥太郎は、「其様な理を聞きたる覺なし」と云ひて、木の下に止まれり。

故、聞き落したるならん」と云ひ、強

ひて亥太郎の手

を取りて、木の

下を去らしめしが、

未だ遠くも行かざるに、電、

眼をくらし、耳も破るゝば

かりに、鳴りとどろけり。

二人は、思はずたふれ、しばらく

ありて、後を見しに、既に、さきの木

は、雷の爲めに、拆け居たり。亥太郎は、

大に怖れ、金作の手を握りしめて、「あ

あ危かりし、若しも君が居らずば、我は

打ち殺されしならん」と云ひて、深く謝した

り。

亥太郎は、これより、學問の益あること

を知りて、勉強なる小兒となりしとぞ。

亥邊雷理電

拆怖握危殺

第二課

たのしわれ



幾怨眺亦誘
第七課

翼の折れたる雀

ある時、一羽の雀、翼を折りて、木の梢より、路のかたへに落ち來りしが、此路は、往來はげしき處なる故、雀は、如何にもして、逃げ去らんと、度々羽ばたきしつゝ、彼方此方にまろび居たり。

友雀は、追々に群り來り、此有様を見て、何卒之を助けんと、相談せる様子なりしが、やがて、二羽の雀來りて、前の雀



の兩の翼を、嘴にてしかとくはへ、飛び去らんとしたれども、思ふ如くにならざりき。友雀の一群は、やかましき迄に、さへづり居りしが、遂に四五羽の大雀、いつこへか飛び去りて、其中の一羽の雀は、長さ五寸許の枝をくはへ來りて、彼の雀の前に置きたり。其

時、二羽の大雀ありて、其枝の兩端をくはへて、其眞中を、彼の雀にくはへさせたり。

かくして、二羽の大雀は、其間に、彼の雀をはさみ、かきねを越えて、遊園の方へと飛び行き、生ひ茂れる大木にまとへる、つたかづらの上に止れり。又群れ居たる友雀も、皆さへづりつゝ、從ひ行き、彼の憐なる雀の、十分落ち付きたる様を見とどけ、大に喜びて、おもひおもひに別れ去りたりとぞ。

翼梢往卒談越茂

第八課

小兒の惡戯

二人の小さき細工人あり、卵を入るゝために、一つの小さきかごを作らんと思ひ立ち、毎日彼方此方に行きて、しきりにわら小枝などを集め來り、それを以てかごをあ



みたり。

二人は、數日骨折りて、やうやくかごを作り終り、絹の如く滑かなるものにて、其うらを付け、甚だうつくしきかごに仕上げたれば、二人は喜びて、蒼色にて黒き點ある卵、四箇を入れ置きたり。

ある日、此細工人等は、他に用ありて、出で行きたる留守に、二人の小兒、ふと其すまひの前を過ぎて、彼のかごを見付け其すまひに入り込みて、かごと卵とを持ち去れり。

程なく、さきの細工人等は、家に歸りて始めて大切なるかごと卵との失せたるを知り、胸もさくる許に悲みたり。汝等は皆、此かごを持ち去りし小兒等を、悪くき人と思ふならん。

されば、今此かごを鳥の巢とし、其持主を小鳥として、其すまひと云ひしは、灌木なりと考ふるも、其中に侵し入りて、之を取り出すは、實に惡しきことならずや。

戲細工蒼點

留失灌木侵

第九課

日本武尊

日本武尊は、景行天皇の御子にして身のたけ高く、力飽く迄強く、熊曾及び東夷を征伐したまひ、その功、高かりけるが、御年三十にして薨じたまひぬ。むかし小碓と十六歳の熊曾のたける天皇、皇子にたけるをうたせ皇子は、わらべにいで立ちて、忍びて、陣屋に折なりければ、酒もりしつゝ、あひ臥したるを、



云へる皇子、おん時に、そむきしかば、おほせつけ、たまひしに、入りが給ふ。

此時、たける、呼び入れて、其まゝにかねてより

たけるをうたせ

皇子は、わらべに

忍びて、陣屋に

折なりければ、

酒もりしつゝ、

あひ臥したるを、

たけるをうたせ

皇子は、わらべに

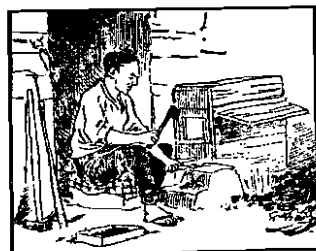
忍びて、陣屋に

折なりければ、

かくしたまひし
たゞ一 つきと
たける、おどろき
皇子の武勇に
日本武 てふ
たてまつりてぞ、
其時よりぞ、
日本武 とは、
景行 飽 熊曾 東夷
征伐 薨 小碓 陣
第十課
おもなる金属 一
鐵は、堅く且強くして、甚だ要用のかね
なり。吾等、若し鐵を得ること能はずば、
其不自由は、如何なるべきぞ、吾等の
平生用ふる品を見れば、鐵にて作りたる
ものの多きを知らん。
吾等は、曾て鍛冶の細工場に行きて、釘
を作るを見しことあり。鍛冶は、火
の中に鐵を入れ、ふいごにて火を
吹き、鐵の赤くなるを待ちて、火中よ
りはさみ出し、かなとこの上にのせて打

劍にて、
つきたまふ。
目を開き、
おち恐れ、
御名をば
うたれにし。
この皇子を、
たゞへまつりし。

ちのばす。
其時、火花は、はなびのごとく、四方
に飛び散るなり。
こゝに、又ある仕方にて、堅くしたる鐵
あり。其鐵をはがねと云ひ、小刀かみ
そり等の刃を作るには、此はがねを
用ふるなり。
銅は、鐵に次ぎて多く、且要用のかね
にして、鐵よりも、やはらかくして、うち
のばし易し。故に、銅板ゆわかし銅壺等に
作り、又細き針金にも作る。我が國に
ては、銅をもて、一厘五厘一錢二錢
の貨幣を造る。
亞鉛もまた、うちのばし易きかねなり。
亞鉛にて、屋根をふ
きたるは、吾等のま
見る所なり。
鉛は、其色、亞鉛に
似て、やゝ柔かに、目
方はおもくして、火に
とけ易く、てつばう玉 おも
りなどに用ふ。錫も



また、其色亞鉛に似て、少しく光あり、
皿鉢茶つば等を作り、其用多きかね
なり。

金属 鐵 鍛冶 釘
銅 壺 厘 鉛 錫
第十一課

おもなる金属 二
金は、世に多からず、美麗にして價貴き
かねなり。其色、黄なるにより、黄金と
もいふ。我が國にては、金にて造りた
る、一圓二圓五圓十圓二十圓の貨幣あ
り。又金の時計ゆびわなどは、吾等
のしばく見る所なり。
金は、打ちのばせば、ほとんど日光を透す
迄に、うすくなすことを得。額ぶち屏
風等に用ふる金箔は、即ち金をのば
したるものなり。

銀は、其色白く、光強きかねにして、
五錢十錢二十錢五十錢一圓の貨幣を造
り、又きふすゆわかし時計等を作るに
用ふ。銀は、甚だ美麗なれども、金の
如く、貴く且まれなるものには非ず。

水銀は、其色銀の如く、甚だ奇妙なる
かねにして、之を盆などの上に落す
時は、細かなる數多のたまとなりて、
四方に散りみだるものなり。されど、其
たまは、鐵鉛などの如く、かたまり居る
ものにはあらで、あだかも蓮の葉の上
の露にひとしく、これを手に取らんと
試みるも、決して取ること能はざるべし。
しかし露の玉の如く、指をうるはず
ものに非ず。
水銀は、硝子板のうらにつけて、鏡を
つくり、又細き硝子のくだに入れ、其
昇降によりて、寒暖の度をはかるに
用ひ、其他種々の用あるものなり。



今 吾等の學びたる、鐵 銅 亞鉛 錫 金 銀
水銀等を名づけて、金属といふ。七

にも 各種の 金属 あれども、 此等を、
最も 要用 なるもの とす。 金属 は、 總べて
皆、 地中 より 採り出すもの なり。

價麗 園額 屏風
箔銀 蓮硝子 昇

第十二課

正雄の あうむ

正雄 は、 作太郎 より、 一羽の 鸚鵡 をもら
ひて、 これを 飼ひ置きたり。 あうむ は、 能
く 人に 馴れ、 能く 人の 言葉 や、 鳥 獸
の なき聲 等を まねする 鳥 にして、 又 他
の 鳥 の 巢 を うばふ け ある もの な
り。

正雄 の 鸚鵡 は、 第一に 正雄 の 名 を お
ぼえ、 正雄 が、 籠 の 傍 に 来る を 見る
時は、 「マサヲ マサヲ」と 呼びたり。 正雄
は、 間 も なく、 「マサヲ サン」と 呼びしむ
る こと を 教へたり。

其後、 此 鸚鵡 は、 善く 馴れたる 故、 正雄
は、 常に 籠 の 戸 を 開き置き、 鸚鵡
の 自由 に 任せしに、 ある 朝、 正雄 の
枕邊 に 來りて、 「マサヲ オキヨ、 マサヲ オキ

ヨ」と 呼びたり。 これは、 母 が、 毎朝、 正
雄 を 呼び起す を 聞きおぼえて 居たる なり。
ある 日、 此 あうむ は、 雀 の 巢 を 見付け、
自分 に 子 を 持たざりし 故に、 其 親鳥
を 逐ひて、 自ら 五羽 の 子 の 母 と なり、
其 時 より は、 籠 へ も 歸らず、 永く そ
こ に 止まりて、 子 を 育てたり。



ながら、 庭 を あるき、 又は、 少し 隔りた
る 所 まで、 飛び行く こと ありき。 其 様子、
實に を かしければ、 正雄 は、 之 を 何よ
りの 樂み と 思ひたり。

鸚鵡 馴籠 枕 逐

永稍 屢隔

第十三課

しひたけ

きのこの るるにて、 食用 とす べき 物、

種々 ある 中 にも、 松だけ しひたけ など は、
最も 味 よきもの なり。 されど、 松だけ は、
腐り易くして、 しほづけ くわんづめ の 外、 貯
へ方 なく、 又 かく 貯へたる は、 其 味、
大に 新しき 物 に 劣れり。 然る に、 しひた
け は、 ほして 之 を 貯ふ べく、 味 も、
ほしたる 方、 却て 美 なる もの なり。

しひたけ は、 しひ の 朽ちたる 根、 又は きり
株 に、 自然に 生ずれども、 其 需め、 甚だ
多き 故、 多く は、 之 を 作る。 其 法 は、
通例、 秋 の 土用 前後 に、 しひ の 木 を
伐り、 長さ 四五 尺 位とし、 之 を たてに
あり、 斧 にて、 表皮 に きず を つけ、 風
通り よき 林 の 中 に 捨て置く なり。

かくして、 凡 三年 も 立ちし 後、 前 の 木
の、 半 朽ちたる 物 を、 よこ木 に たてかけ
て 置く 時は、 春分 の 頃 に 至りて、 し
ひたけ 發生す。

しひたけ を 取りし 後は、 又 此 木 を 林
に 置き、 夏 の 土用 の 頃 に 至り、 半
日間 も 水 に 浸し、 之 を 取り出して、
ひよきの 木 はだ に 透る 様に、 つちに

打ちたき、 前 の 如く、
よこ木 に 立てかけ置く
時は、 兩二 日 にして、
再び しひたけ 發生する な
り。



しひたけ は、 とりたる 後、
成る 可く 速に ほしあげざれば、 くらること
有る 故に、 多く は、 むろ に 入れ、 竹簀
の 棚 に 並べ、 其下 の 爐 に 火 を 入
れ置き、 之 を ほす。 或は、 又 竹ぐし
に さし、 火 の ほとりに 並べ、 ざる を
以て 之 を おほひて、 ほす こと あり。 ほし
しひたけ は、 近來 外國 へ も 出し、 其 た
か 三千 萬 斤 餘 に 及べりと 云ふ。

貯劣 朽株 需

斧簀 爐 近

第十四課

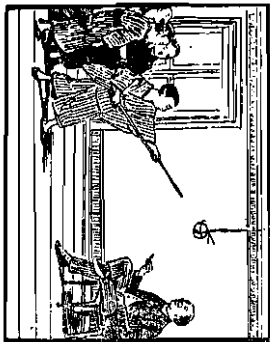
智慧の 垣

某村 に 小山 ありて、 其 まはりに 八けん
の家 あり。 山 には、 松 の 木 生ひ茂り、
九月 十月 の 頃 には、 松 簀 多く 生ず。
此 小山 は、 もと 外側 なる 四軒 の 家の

つと突きたり。されど、右にはづれたれば、再び杖を取り直して、つと突きたりしに、

今度は左にはづれたり。

それより、十餘人のものを試みたれど、ひとりも出来ざりしかば、主人は、誰をも、用ふること能はざる趣を告げ、再び新聞に廣告して、雇人を募りたり。かくて、二三日の後、



又數人の望み人、此家に來りしが、其中に、先日來りしもの一人まじり居たり。主人は、例の如く球をつるし、彼少年は、杖を取りて身がまへし、やがて突き出しに、球は、ボンととび上り、次に又突き出しに、同じく球は上りたり。主人は、手を打ちて、「今一度試みよ」とのことばの下に、直に突き出し、が、矢張りまたあやまたざりき。

やす物買ひの錢失ひ。

時かぬ種はえぬ。

雞口となるとも、牛尾となる勿れ。

ふくろの中の鼠。

ころばぬさきの杖。

得手に帆をあぐ。

敵に糧。

惡事千里。

櫻は花にあらはる。

木に竹をつぐ。

ゆだん大敵。

めくら、蛇におぢず。

木は、方圓の器に従ふ。

鹿を追ふれふし、山を見ず。

畫の花には、香なし。

人のふり見て、我がふり直せ。

燃ゆる火に薪。

前車のくつがへるを見て、後車の戒めとす。

過ぎたるは、猶及ばざるが如し。

鵜溺 芒穂 擧

帆 糧 櫻 蛇 薪

尋常小學讀本卷之六

目次

太陽

日の旗

立身の宴會

あまだれ石を穿つ

らんどししるの話

水の周遊

火のゆくへ

鎌倉権五郎景正の話

古戰場

正雄とお清との問答

葛道権郎子の話

あるふれつど王の話

象

野中兼山のみやげ

源平あそび

平清盛

ばんの木

鎌倉

獅子

(二章)

(二章)

(二章)

主人は、「如何にして、汝は、かく巧になりしぞ」と彼の少年に問ひしに、「私は、勉強せば、あの球のつき得ぬことはあるまじと思ひ、先日、家に歸りし後、庭に出で、木の枝に球をつるし、幾度となくつき試み、今朝も、家を出る前に、一時間程試みたり」と答へたり。主人は、これを聞きて、大に感賞し、遂に此少年を雇ひ入れしが、其後、何事も勉強して能く働き、長くも年月を経ずして、一番番頭に昇れりとぞ。

第三十課

諺

落花、枝にかへらず。

昔はむかし、今はいま。

鵜のまねする鳥、水に溺る。

井の中の蛙、大海を知らず。

登ることいよく、高ければ、落つることいよく、深し。

おち武者、芒の穂におづ。

靴をへだて、かゆきを搔く。

ベノ王の話

砂槽

後醍醐天皇

楠正成

楠正行

るびんせんくるそうの昔話

(二章)
(三章)
(二章)

くべき大船も、其沖に出でし後は、小きき水鳥の浮ぶやうに見ゆるなり。大なる太陽の小きく見ゆるも、また此理に外ならず。

第二課

日の旗

御國の旗は、あさ日かけ、

さしならぶべき國やある。

いくさの時も、常の日も、

かゞやきわたる日の旗ぞ。

アハレハレ、日の旗、わが日の旗、

八洲の外まで、てらせ日の旗。

旭日にほふ、さくら花、

はな／＼しきは つはものぞ。

國の光を輝かし、

高くかゝげよ、日の旗を。

アハレハレ、日の旗、わが日の旗、
八洲の外まで、てらせ日の旗。

とよさかのぼる 日の本の、
めぐみあまねき 御かけかな。

尋常小學讀本卷之六

第一課

太陽

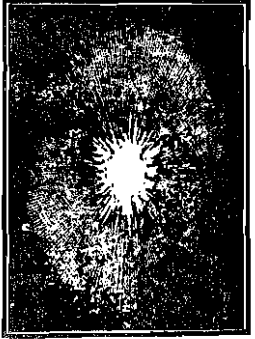
太陽は、日々光と熱とを、吾等の世界に、送るものなれど、夜は、吾等が住める土地、太陽に向はざる故にその光と熱とを受くこと能はず。

吾等の世界より、太陽迄は、其へだより甚だ遠く、凡そ三千六百萬里あり。今、假に人あり、太陽に行かんとし

て、大砲のたまの中に入りて旅せん、其八幼き時より出立して、日夜休まず三分間に一里つゝ進むも、百歳のよはひに至りて、猶半途にも達し得ぬ程なり。

太陽、はかく遠なる處にある故に、小きく見ゆれども、其体甚だ大にして、吾等の住める世界よりは、ほとんど百萬倍あるものなり。

吾等、若し風を揚ぐるに、其あがること高ければ、如何なる大風も、益小くなりて、遂には見えぬ程に至るべし。又海岸に至りて、舟を見るに、港の中には、夥



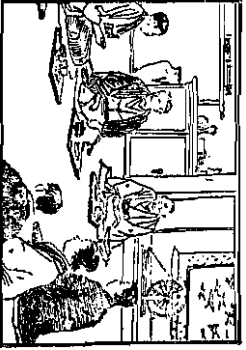
第三課

旗 八洲 旭 輝

立身の宴會

一人のやめもあり、家甚だ貧しく、僅に糸を紡ぎて、暮しを立てたる程なりしが、其子を、日々學校に通はせたり。されば、此子は、母の志を徒にせず、勉強せしかば、大に立身して、遂に、士等社會に立つに至れり。

此八、或る時、宴會を開きて、多くの人を招きしに、其座敷の飾り付けの見事なること、は、實にいはん方無かりしが、其床の間には、甚だ粗末なるき糸車を飾り置けり。



招かれし人々は、其糸車を見て、甚だ之を不審に思ひ、其由を主人に問ひけるに、主人は、これ、我が母の糸車にして、母は、常に此車にて、糸を紡ぎ、子を學交て通はしめたりと答

へたり。

主人は、又客の悉く集りたるを見て、其席を退き、しばらくして、容貌いやしからざる、一人の老婆の手を取りて連れ來り、其傍に坐らせたり。これ即ち、主人の母にして、諸客の最も敬ふべき人なりき。

かくの如きよき子を持ちて、學問をさせ、終に、よき仕合になりたる老母の心は、いかばかり嬉しかりしことならん。

宴會 僅紡招飾

床粗 席貌婆

第四課

あまだれ石を穿つ

時は、梅雨のなかばにて、さみだれ長くふりつゞき、庭の景色もいと寂しかりき。お清は、ひとり机により、書物をよみて居たりしが、其紙数の多かりければ、讀みあぐみて、外の方をながめんと、窓の障子を開きたり。

お清は、あちこちとながむる中に、ふと軒下の石に、水の溜れるに心付き、猶よく其石を見るに、丁度あまだれのあたる所に、指のはひる程の穴ありしかば、曾て聞き居たる、「あまだれ、石を穿つ」と云へる謠を思ひ出せり。此時、お清の考ふるに、僅數滴の水が、石の上におつればとて、何の跡をも留め得べきものにはあらざるに、今あ

まだれの、かく石を穿ちたるは、何故ぞや。こは、長き年月の間、常に水の、一所におちて、石をうち、目にも見えぬ程の小を積み

て、遂にこゝに至りたるものならん。あゝ小を積みて怠らざるの力は、かくまで大なるものかなと、深く心に感じたり。



よりて、再び前の書物に向ひ、「あまだれ、石を穿つ、われ、いかでか、此書を讀み終らざるべき」とて、また讀み始め、つひに巻を終へたり。これより後、お清は、何かむづかしきことを爲して、あきの來る毎に、あまだれの、石を穿てることを思ひ出で、己が心を取り直しては、勤め勵みて、常に其事をしとげたりとぞ。

梅雨 寂障子軒

溜滴跡積勵

第五課

あまだれ石の語

英吉利國に、らんどしーると云へる人あり、幼き時より、書を好みしが、遂に名高き畫かきとなりて、誰知らぬもの無きに至れり。



らんどしーるは、幼き時、常に、母に畫の handbook をかきてもらひしに、母は、靴鞭其他通常の品物をかきて與へたり。らんどしーるは、同じ物を再三畫きて倦みたりしかば、或る時、父にかきてよと請ひしに、父は、少しく外へ出で、朋友と遊べとて、廣き野原に出しやりたり。

此野原には、野飼ひにせる牛馬など多く居たりし故、らんどしーるは、之を畫かんとて、先づ臥したるものより始め、遂には、其動くさま、走りまはる様をも畫きたり。其後、らんどしーるは、吾が目にする、動物は、何にても皆畫き習ひて、遂に動物の畫に最も妙を得たり。

らんどしーるは、動物を愛するの心甚だ深くして、人の、これをむごく取扱ふことを見るをも厭ひたり。其頃、倫敦にては、犬の耳を切ることはやりしが、らんどしーるは、決して耳を切りたる犬の畫をかゝりしがため、大に犬の耳を切ることを減じたりと云ふ。

英國の女王は、らんどしーるが、深く心を藝術によせて、勉強する事を聞かれ、いと丁寧に之を待遇して、爵位をも與へられしとぞ。

英吉利 鞭厭 倫敦

減藝 遇爵

第六課

水の周遊一

吾は、水の一滴にて、甚だ小なるものなれど、諸所をめぐるしは、實に驚くべき程なれば、今其旅の物語をなすべし。

吾は、先づ數多の仲間と共に、旅行せんと思ひ立ち、仲間ものは、みな相互に睦ましくして、決して別れしことなく、常にたのしく同行せり。

吾等は、先づ泉より出で、細き谷を通り、初めは、老人の歩むが如く、緩々として進みたりしが、忽ちにして駆け出し、互に先を爭ひ走りて、或は、石につきあたり、或は、互につきあたり、上になり

下になりて、狂ひまはりたり。

斯く狂ひ走れども、吾等の体は、決して傷を負ふことなく、益驅け狂ひて、遂に大なる岩ををどり越えて、坂よりまろび落ちたり。

この坂をまろび落つるを、世の人は、瀧と云ふなり。

吾等は、そこに暫く休みて、それよ



第二十四課

砂糖

砂糖は、種々の植物より製することを得れども、我が國にては、重に甘蔗より取るなり。甘蔗は、暖き地に適する故に、我が國の中にて、甘蔗を培養する國は、薩摩、沖縄、肥前及び南海道の國々と、伊勢、尾張、駿河の數國とに過ぎず。

甘蔗は、葉莖共に、能くもろこしに似て、其たけ一丈位迄成長す。其成長の時期をはかり、根もとより之を刈り取り、葉を去りて束とし、之を甘蔗の搾り場に送り、石又は鐵にてつくりたる搾り器械を以て、其汁を搾り取るなり。

其搾り汁に、牡蠣灰少しを加へ、釜に入れて煮、白きあわの立つ時は、能く注意して之をすくひ取り、なほ煮ること久しければ、汁は、追々にこくなる故、其善き頃を計りて、之を汲み出し、



瓶に移して冷し置くなり。汁は、冷ゆるに従ひて、おひ／＼にかたまり、遂に白下と云へる、粗製の砂糖となる、三盆、天光など云へるは、此白下を、猶精製せるものなり。讃岐の白砂糖、薩摩の黒砂糖は、我が國にて、尤も有名なり。

甘蔗 適 薩摩 沖縄 肥前
搾り器械 牡蠣灰 釜 讃岐

第二十五課

後醍醐天皇

さして行く、笠置の山をいでしより、あめが下には、かくれがもなし。

此歌は、後醍醐天皇が、京都を逃れさせ給ひて、あちらこちらとみゆきせられし時、天皇にておはしましなから、賊軍に苦められ、天下の廣きも、かくれさせ給ふべき處さへなきをなげかせられて、よみ給ひしなり。

後醍醐天皇は、英明の君にておはせしが、その頃、鎌倉の家人にて、我が意をほしきまにせる、北條高時の振舞を憤らせ給ひ、之を亡さんと謀られしに、其謀、鎌倉に聞えければ、高時、急ぎ軍勢を京都にさし向けたり。

天皇驚き逃れて、笠置山にたてこもり給ひしが、官軍遂に打ちやぶられ、恐れ多くも、天皇は、陪臣たる高時の計らひにて、隠岐の國にうつされ給ひぬ。

朝より三種の神器を、北朝の後小松天皇に傳へられ、南

北の兩朝、合一とはなれり。

笠置 賊 謀 陪臣 楠 義貞

誅 辰 大塔 豐仁 龜山

第二十六課

楠正成

攝津の國、湊川には、湊川神社といへる大社ありて、楠正成を祭れり。かつて權中納言德川光國、正成の討死せし處を尋ね出し、其處に石碑を建て、「嗚呼忠臣楠子之墓」と云ふ、八字をほりつけられたり。此社は、其石碑のある處に建てられたるなり。

楠正成は、幼名を多聞と云ひ、河内の國、金剛山の西に居りし豪族なるが、後醍醐天皇、笠置山に逃れさせ給ひし時、藤原藤房に仰せられて、

始めてこれを召させられたり。正成、急ぎ行在所に至り、天皇にまみえておほせを受け、やがて城を赤坂に築き

て、度々賊軍を破りしが、城中兵糧にとほしくなりし故、其城を出で、暫く潜み居たり。



第二十四課

砂糖

砂糖は、種々の植物より製することを得れども、我が國にては、重に甘蔗より取るなり。甘蔗は、暖き地に適する故に、我が國の中にて、甘蔗を培養する國は、薩摩、沖縄、肥前及び南海道の國々と、伊勢、尾張、駿河の數國とに過ぎず。

甘蔗は、葉莖共に、能くもろこしに似て、其たけ一丈位迄成長す。其成長の時期をはかり、根もとより之を刈り取り、葉を去りて束とし、之を甘蔗の搾り場に送り、石又は鐵にてつくりたる搾り器械を以て、其汁を搾り取るなり。

其搾り汁に、牡蠣灰少しを加へ、釜に入れて煮、白きあわの立つ時は、能く注意して之をすくひ取り、なほ煮ること久しければ、汁は、追々にこくなる故、其善き頃を計りて、之を汲み出し、



瓶に移して冷し置くなり。

汁は、冷ゆるに従ひて、おひ／＼にかたまり、遂に白下と云へる、粗製の砂糖となる、三盆、天光など云へるは、此白下を、猶精製せるものなり。讃岐の白砂糖、薩摩の黒砂糖は、我が國にて、尤も有名なり。

甘蔗 適 薩摩 沖縄 肥前

搾り器械 牡蠣灰 釜 讃岐

第二十五課

後醍醐天皇

さして行く、笠置の山をいでしより、

あめが下には、かくれがもなし。

此歌は、後醍醐天皇が、京都を逃れさせ給ひて、あちらこちらとみゆきせられし時、天皇にておはしましなながら、賊軍に苦められ、天下の廣きも、かくれさせ給ふべき處さへなきをなげかせられて、よみ給ひしなり。

後醍醐天皇は、英明の君にておはせしが、その頃、鎌倉の家人にて、我が意をほしいまゝにせる、北條高時の振舞を憤らせ給ひ、之を亡さんと謀られしに、其謀、鎌倉に聞えければ、高時、急ぎ軍勢を京都にさし向けたり。

天皇驚き逃れて、笠置山にたてこもり給ひしが、官軍遂に打ちやぶられ、恐れ多くも、天皇は、陪臣たる高時の計らひにて、隠岐の國にうつされ給ひぬ。

此時、官軍にて、名ある者は、たゞ楠正成のみにして、賊

軍、天下にはびこりしが、やがて新田義貞、上野の國より

軍勢を起して、高時を誅しければ、天皇、再び京都に

歸り、天下の政事を取り行ひ給へり。此時始めて、鎌倉

にて久しく行ひ來りし、一切の政事を、朝廷に取り戻され

しなり。

其後、天皇、少しく政事に倦み

給ひ、大功ありし大塔宮を押

しこめ、足利尊氏を用ひさせ

給ひしが、尊氏、遂に天皇に

そむき、自ら征夷大將軍と稱

して、官軍に敵したり。こ

れより、數度の戦ありしが、楠正成、湊川に討死せしよ

り、官軍の勢、次第に弱くなり、京都にては、尊氏、豊仁

親王を立て、天皇とし、是を光明天皇と稱したり。か

くて後醍醐天皇は、吉野の行宮にうつり給ひしかば、天

皇の方を南朝と稱へ、光明天皇の方を北朝と稱へたり。

されば、此時は、諸國の武士も、南朝に従ふものと、北朝

に仕ふるものとありて、兵亂年々うち續き、天下一日も

安き時なかりき。南朝は、後醍醐天皇より、後龜山天

皇まで、三代にて、五十餘年間續きたりしが、遂に、南



朝より三種の神器を、北朝の後小松天皇に傳へられ、南

北の兩朝、合一とはなれり。

笠置 賊 謀 陪臣 楠 義貞

誅 梟 大塔 豊仁 龜山

第二十六課

楠正成

攝津の國、湊川には、湊川神社といへる大社ありて、楠正

成を祭れり。かつて權中納言徳川光國、正成の討死せ

し處を尋ね出し、其處に石碑を建て、「嗚呼忠臣楠子之

墓」と云ふ、八字をほりつけられたり。此社は、其石

碑のある處に建てられたるなり。

楠正成は、幼名を多聞と云ひ、河内の國、金剛山の西に居

りし豪族なるが、後醍醐天皇、笠置山に逃れさせ給ひし

時、藤原藤房に仰せられて、

始めてこれを召させられた

り。正成、急ぎ行在所に至

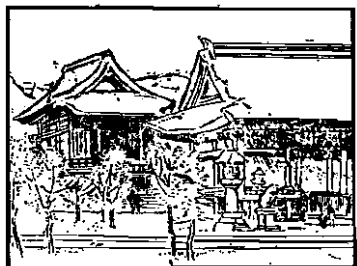
り、天皇にまみえておほせを

受け、やがて城を赤坂に築き

て、度々賊軍を破りしが、城

中兵糧にとほしくなりし故、

其城を出で、暫く潛み居た



すでにして、正成、又金剛山の千早に城を築きしに、賊軍、之を聞き、總勢八十萬人にて、急ぎ其城を圍みしが、先に隠岐にうつされ給ひし後醍醐天皇は、この時そこを逃れ出で、伯耆に着き給ひ、折から、北條高時は、新田義貞にほろぼされしかば、千早のかこみとけ、天皇は、伯耆より京都に歸り給へり。



後、足利尊氏の、天皇にそむくに及び、正成、屢奇計をめぐらして、賊軍を苦めたれど、賊軍、勢猶衰へず、尊氏、九州の軍勢をかり集めて、京都に攻め寄するに及び、正成の計、用ひられざりしかば、心を決して、攝津の國櫻井の宿にて、子正行に遺訓をなし、天皇より下し賜りたる寶刀をも、これに與へて、河内の國にかへし、自ら湊川におもむきて陣取せり。

湊川 碑 嗚呼 墓 金剛山 豪族

兵糧 伯耆 遺訓 寶刀

第二十七課

楠正成 二

此湊川の戦は、實に、官軍賊軍の勝負の決する所にて、賊

の軍勢は、海と陸とより進み、總勢幾十萬なるを知らず。然るに、正成は、僅に七百人の兵を引き連れて、義貞と合し、賊軍と戦ひしが、もとより生きて歸る心なければ、鋒銳く、大に敵を憚ましたり。されど賊は、目にあまる大軍にて、新手を引き換へて戦ひし故、正成の軍勢は、追々に討死して、残れる者、僅に、七十三騎どぞなりにける。

正成は、もはやこれ迄と、湊川の北に當れる百姓家に入り、弟正季と刺し違へて死したり、年四十三、一族の者十六人、士卒五十人、皆共に自殺せり。其後、子の正行、正儀など、皆正成の教を守りて、忠勤比類なかりしかば、南朝も、これが爲めに、久しく其勢を保ちしなり。

嗚呼かぐはし 楠のふた本、

あゝたえせし みなと川。

浪の音も、身にぞしむなる、

其あはれ、そのいさを。

忠臣あゝ忠臣、兄弟の人、

忠臣嗚呼忠臣、たぐひなや。

鋒 惱 換 騎 正儀

第二十八課

ろびんそん、くるうそうの昔話 一

ろびんそん、くるうそうは、十九歳の時、已が安穩なる住

居に倦みて、世界を巡り遊ばんことを思ひ立ちたりしに、或る日、船長某の子息來りて、くるうそうを誘ひ、共に水夫となりて、航海せばやと云ひしかば、大に喜びて、直に家を出立せり。

ふたりは船に乗り込みて、二三日航海せしが、忽ち大あらし吹き起りて、船は、大なる岩に乗りかけたれば、人々急ぎて小舟に移り、あたりの島にこぎつくとせしに、途中にて、皆溺れ死し、くるうそう唯ひとり、幸にも大波にゆられて、其島の濱にうちあげられたり。

此島は、ひろき海中の孤島にして、人家も無く、食物を得ること、かなはざりければ、くるうそうは、あらしの靜まるを待ちて、先づ食物を求めんが爲めに、先の破船に泳ぎ行き、板と材木とを結びつけて、やうやく一つの筏を作り、牛肉羊肉のくわんづめ、衣服、帆もめん、小銃、彈藥、及び其他の器具を是につみ、又一疋の大と猫とを見出し、之をも共にのせて歸りたり。

くるうそうは、其住まひを作らんとて、一つの洞穴をほり、其入口には、強き材木を列ねて、ぢやうぶなる高塀をたて、階子にて、其中に出入し、夜は、此階子をば、内に取り入れたる。斯く、入口に戸を付けずして、高塀をたて、階子にて出入せしは夜中、猛獸の入り來らんことを

恐れし故なり。

安穩 巡 誘 航海 濱 孤島 筏 小銃 列
第二十九課

ろびんそん、くるうそうの昔話 二

ある日、くるうそうは、野に出で、山羊の子を見つけたれば、此島に、山羊の居る事を知り、それより追々多くの山羊を得て、之を飼ひ、其乳及び肉を食し、又其脂を以て、蠟燭をつくることを工夫せり。又此島の海岸には、大なる龜、澤山に居るを見付け、手づから之を捕へ、其肉を食して、實に其美味なることを知れり。

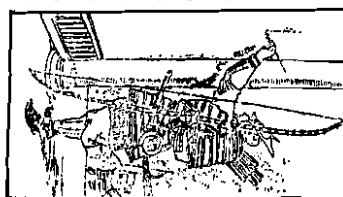


こゝに、くるうそうを尤も喜ばしめたるは、一羽の鸚鵡を得しことにて、くるうそうは、ひまにまかせて、此鸚鵡に、短き言葉をお教へたり。かくて、久しき間、此無人の孤島に在りて、風の音と波の音との外、たゞ鳥獸の鳴き聲を聞くのみにて、嘗て語り合ふべき相手もなかりしかば、くるうそうは、此鸚鵡の短き話を、此上もなき慰みと思ひたり。くるうそうが、さきに船より運びたる袋に、はからずも小

我が國

尋常小學讀本卷之六

行宮に詣り、「臣此度の戦、敵將の首を得るに非ずば、必ず生きて歸らじ」と奏せしに、天皇、御身近く、正行を召さ
れ、「朕汝をもて頼み
とす、深く其身を愛せ
よとのたまひしかば、
正行、天恩に感じ、涙



145

尋常小學讀本卷之七

第一課

我が國

汝等、我が國の地圖を見しことありや。我が國の地形は、ほぼ半弓に似て、北東より南西に連り、四箇の大島と、數多の小島とより成れり。

其中央に在りて、最も大なる者を本州と云ひ、其北に在るを北海道と云ひ、西南に在るを九州と云ひ、本州と九州との間に在るものを四國と云ふ。又、九州の西南に、一帯の島嶼あり、之を琉球諸島と云ひ、本州の南にある島嶼を豆南諸島といふ。

我が國の面積は、凡そ二萬四千八百方里にして、之を大別して、畿内及び東海東山北陸山陽山陰南海西海の諸道とし、さらに之を分ちて國となす。全土、八十五國にして、其外豆南諸島あり。一道廳三府四十二縣を置き、之を支配す。

我が國は、氣候溫和にして、地味ゆたかに、多く米茶桑等を産し、誠に愛すべき國柄なり。始めて、此國を建てたまひし天子は、神武天皇にして、今上天皇に至る迄、百二十二代、二千五百四十餘年にして、皇統の連綿たるは、世界萬國にも、其比類を見ざるなり。されば、吾等

は、我が國を愛し我が君に忠を盡すべし。

第二課

祝へ我が國を

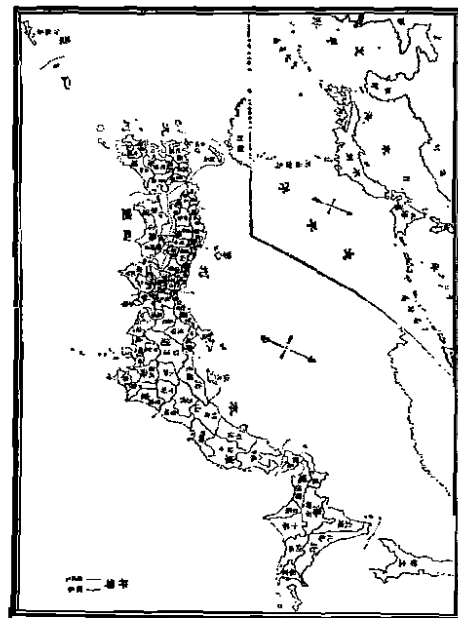
祝へ、我が國を。 みづほのおしねは、

野もせにみちて、 しろかね黄金、

花咲きさかゆ。 いはへいはへ、

君のため、 わが國を。

祝へ、我が君を。 めぐみのしき波、



やしまにあふれ、 あまねき春風、
草木もなびく。 いはへいはへ、
國のため、 わが君を。

第三課

大椿の話

足利氏の始の頃、九州に大椿と云ふ人あり、少き時より、學問を好みしが、其頃には、印刷の業、未だ十分に開けずして、書物乏しく、九州にては、四書五經をもとめて、これを學ぶことさへ叶はざりしかば、遙々常陸の國に來りて、漸く其素讀を習ひたり。

されど、其講義を聞かんとする頃に至りては、資用既に盡きて、日々の食をさへ得ること能はず、ある人の情によりて、豆一斗を得たれば、これを貯へ置きて、日毎に少しづつ炒り、食にみて飢を忍びて、勉強すること五十日に及びたり。



後、此豆も盡きて、もはや食を得べき術無かりしかば、故郷に歸りて、親類に相談し、やうやく僅の錢を得て、再び常陸に來り、日々怠なく勉強し、遂に四書五經の講義

をも、悉く聞き終はることを得たりとぞ。

汝等、今の世に生れて、書物を得んと欲すれば、容易に其書物を得べく、又學ばんと欲すれば、何處にても、入りて學ぶべき學校あり。されば、これを大椿の頃に比するに、其學問を爲すの難易、果して如何ぞや。

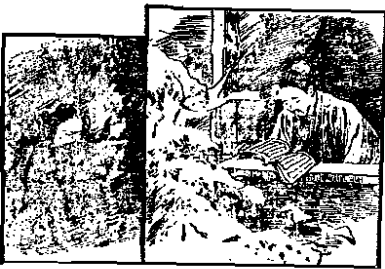
若し汝等も、大椿の如き心掛にて勉強したらんには、實に大學者となることうたがひなかるべし。

大椿 乏 五經 叶 漸 素讀 講義 資用 妙

第四課

螢雪の功
諺に、螢雪の功を積むと云ふことあり。今、此諺の心を説き示すべし。

昔、支那に、車胤と云ふ人ありて、幼き時より、學問を好みしが、家貧しくして、燈をともしずべき資力無かりければ、夏の夜には、多くの螢を捕り來りて、之を囊に入れ、其光にて書物を讀みたりといへり。



又おなじ國に、孫康と云ふ人あり。これも、其家貧しくし

そのふの梅の、おひ風に、
わが住む山も、春めきぬ。
門田のゆきも、むらぎえて、
若菜つむべく、野はなりぬ。

やよひのそらに、野邊見れば、
すみれの花咲く。山見れば、
雪か、あらぬか、そこかしこ、
さくらの花も、咲きそめぬ。

第十一課

立花道雪の話

天正の頃、立花道雪と云へる勇將あり、能く其士卒を愛すること、我が子を見るが如くなりしが、少き時、雷に打たれ、足なへて、歩行不自由なりし故、戰に臨む時は、手輿に乗りて、二尺七寸餘の刀と鐵砲とを、其中に入れ、手に三尺餘の棒を持ち、長き刀を帯びたる壯士百餘人を、左右にひきあを常とせり。

既に戰の始まる時は、此壯士等に手輿をかゝせ、棒にて手輿を叩きながら、音頭を取りて、「早く、此輿を敵中にかき入れよ」と云ひ、若し少しにても後るゝ時は、輿の前後をはげしく叩きて、大聲をあげ、「早く早く」と催促す。

氣なり。

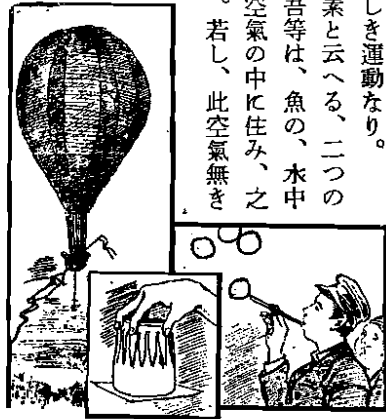
汝等、若し速に走るか、或は手を振るときは、此空氣の、顔或は手にふるゝを覺ゆるならん。夏の日の涼しき風は、即ち空氣の靜なる運動にして、木を倒し家を破る大風は、空氣のはげしき運動なり。

空氣は、重に酸素窒素と云へる、二つの氣體より成りて、吾等は、魚の、水中に住むが如く、此空氣の中に住み、之を呼吸して生活す。若し、此空氣無き處に至れば、恰も魚の、水中を出でたる如く、忽ち死に至るべし。

空氣には、おもみ無

きやうに思はるれど、矢張りおもみあるものにて、空氣より輕き物を浮ばする力あり。しやぼんだま煙などの、空氣中に浮び上るは、能く吾等の知ることにて、風船の、空氣中に上るも、亦しやぼんだまの浮ぶと同じわけなり。

空氣は、亦おす力を持てり。吾等、もしこつぷに水を満てて、西洋紙をかぶせ、之を倒にするも、水こぼれ出づることなし。これ空氣が、下の方より、紙をおすが故なり。



其壯士等は、敵に遇ひて逃ぐるよりは、大聲に促さるゝを耻として、一散に敵中に昇き入れ、長き刀を抜き連れて、敵軍を進撃す。されば、先陣に進みし者共は、「すはや、例の音頭來れり」と云ひて、先を爭ひ戦ふ故に、道雪の軍は、如何なる堅き陣をも切り崩さずと云ふことなし。



若し、又先陣の破るゝ時は、道雪、大聲にて、「早く、我が輿を敵中にかき入れよ、命惜しき輩は、かき入れて後逃げよ」と呼びつゝ、目を見張りて指揮する故、一旦危く見えたる軍も、もり返して勝利となること多かりき。かゝれば、道雪の名は、一時にとゞろきて、敵味方共に其勇を稱せしとぞ。

天正 歩行 臨 手輿 壯士

音頭 催促 昇 進撃 指揮

第十二課

空氣

吾等のまはりに、一種の物ありて、常に吾等の至る處に満てり。されど、其物は、色も無く、臭も味も無ければ、目にも口にも鼻にも、之を知ること能はず。これ即ち空氣なり。

又空氣には、膨脹する性ありて、此他、種々面白き試験あれば、汝等は、他日之を學ぶことあるべし。

空氣 臭 酸素 窒素 氣體

呼吸 生活 輕 風船 膨脹

第十三課

蟻と鳩の話

ある山に、蟻と鳩と住み居たるが、或る日、蟻は、何處よりか、一正のいなごの死骸を引き來りて、之を己が巢に持ち行かんとして、誤りて水溜りに落ち入りたり。

此水たまりは、僅にこつぷに二三杯の水をこぼせる程なれど、蟻のためには、恰も大海に落ちたると同じく、あなただなたにたゞよひて、將に死なんとせり。其時、丁度彼の鳩は、木の枝より之を見下し、早速助け舟として、一枚の葉を落したれば、蟻は、木の葉を得て、始めて大船に乗りたる心地し、遂に難を免れ、大に鳩の恩に感じたり。

其後、鳩は、地に下りて、一心に餌を拾ひ居たるに、獵師は、之を見付けて、善きえものぞと、鐵砲のねらひを定めて、一發ドンと放ちしに、たまはそれて、鳩は、實に危き難を免れたり。こは、蟻が、今鳩の、危難に迫るを見て、かねての恩に報いんと、つよく獵師の手に噛み付き、ねらひをはづさせたる故なり。

し、能く兵を用ひ、又學問をも、好みたる人にして、天

下を治むることに傑く意を留め、且朝廷を尊び敬ひ、自

ら節儉を主として、下を

めぐめり。すべて、事を

爲るには、必ず百年の後

を謀り、種々の掟をも定

めたり、太平二百六十

年餘もうちつゞきたり。

今、其遺訓といへるものをここに記す。

人の一生は、重荷を負ひて、遠き道をゆくが如し、いそ

ぐ可らず。不自由を常と思へば、不足なし。心に、望み

おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長

久のもとめ、怒は、敵と思へ。勝つことはかり知りて、

まくることを知らざれば、害其身に至る。己を責めて、

他を責むるな。及ばざるは、過ぎたるよりまさきなり。

節儉 子孫 重荷 困窮 堪忍 無事 長久

第二十課

江戸城

東京の今の皇居は、もと江戸城と云ひ、徳川氏の居城に

て、今は、本丸西丸ともに焼け失せたれども、其石垣に

用ひたる大石の、澤山なるを見ても、徳川氏の盛なりし

らん。

居城 妻子 参勤 大老 政事

老中 若年寄 旗本 御家人

第二十一課

雨及び雪

夏の日、池沼などの水の稠ることあり。此等の水は、何

處に行きし者なるか。是れ、太陽の熱によりて、水は、

變じて水蒸氣となり、空氣中に浮ひ上るなり。

此水蒸氣、空中に上りて稍冷え、相集りて雲となり、雲又

冷氣に逢ふ時は、凝りて再び水滴となり、地上に向ひて

落ち来る、是れ即ち雨なり。

水の、熱によりて、水蒸氣となり、又水蒸氣の、冷氣に逢

ひて、再びもとの水となるこ

とは、容易に之を試験するこ

とを得べし。今、鐵瓶に水を

入れ、之を火鉢にかけて沸か

す時は、水蒸氣は、其口より

少し離れたる所にて、湯氣と

なり、煙の如く立つを見るべし。其時、若し湯氣の立つ

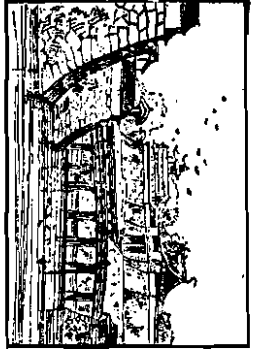
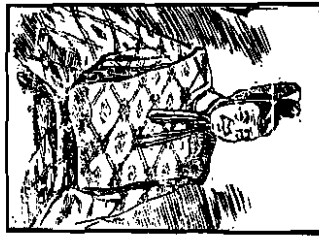
處に、冷かなるものを置く時は、湯氣は、之に觸れて凝

縮し、遂に水滴となりて、したるべし。雨の降るは、

恰も此れと同じけなり。

尋常小學讀本 卷之七

159



事を知るべし。

徳川氏の時には、大名と云へる諸國の領主、みな江戸に屋

敷を立て、其妻子を江戸屋敷に住はせ置き、大名は、参

勤交代とて、毎年己の領地に歸るものと、江戸に残るも

のとき、順番にて定むれども、妻子は、もとより連れ歸

ることを許さざりき。又大老と云ひて、大名の中より選

みあげて、政事を行はしむる重き役目を設け、其下に

は、老中若年寄など云へる役目

ありて、いづれも、大名の中よ

り勤めたり。すべて大名の數

は、二百六十餘もありて、其側

地には、大抵居城を持ち、又旗

本と稱するもの、數千騎もあ

り、其外、御家人など云へる武

士は、皆徳川氏の家來にて、其

數甚だ多かりき。

鎌倉の幕府は、徳川氏にくらばれば、其仕組十分には整は

ず、其上、鎌倉は、日本全國を支配するに不便の場所な

れば、其勢も、徳川氏程には盛ならざりしが、家康の、

江戸城を築きしより、其子孫、世世天下の政事を行ひ

て、ほとんど二百六十餘年の間、人民、皆太平を樂みし

は、江戸と云へるよき場所に居て、政事を行ひたる故な

種々ありて、且美しくしきことを知るを得べし。今、茲

に其おもなるものゝ圖を示す。

沼 水蒸氣 冷氣 水滴 鐵瓶

沸 離 湯氣 凝縮 白片

第二十二課

島津家久琉球を取る

今の沖縄縣は、昔、琉球國と稱せしが、慶長十四年、薩摩

の島津家久、徳川氏に請ひて、これを攻め取りたり。時

に、琉球の商人、多く薩摩に在りしが、島津家にては、

征伐のことを少しも包まずして、願はに、兵船軍器の用

意をなししかば、琉球の商人は、急ぎ歸りて、此由を國

王に申したり。

されば、琉球にては、大におどろき、俄に海邊にとりてを

構へ、備を設けしに、薩摩にては、大に兵をあつめ、多

くの船に打ち乗せて、次第次第に攻め近づき、あなたの

158

30

第二十五課
根

今、一個のかしの實を取りて、之をしめりたる地に時く時は、數日の後、皮は破れて、其中より白き細き物出づ可し。其下に向きて、だん／＼に地中にのび行くものは、根にして、上に向ひて、おひおひにのび、地面の上に出づる者は、これ幹なり。

根と幹とは、共に植物の大切な部分にして、根には、二つのおもなる役目あり。一は、植物をしかと地につけて、其位置を保ち、風などに吹き倒されざる用をなし、又一は、地中より植物の養となるべき液體を吸収して、これを幹葉におくるの用を爲すなり。



根に、二つの種類あり、單根及び複根と云ふ。單根とは、牛房入參の如く、一個の主となる可き大なる根ありて、下端の尖りたるものを云ひ、複根とは、稻などの如く、主根なく、同大の根の、數多なるものを云ふなり。根は、右の二類のみなれど、往々、幹或は枝の、地中に在るものを以て、根と誤ることあり。あやめふきなどの類の、地中にある太き部分は、幹にして、じやがたらしいも

さといもなどの類のは、其枝の、地中にあるものなれども、之を誤りて、根と思ふ者甚だ多し。

根は、もと小根の外に、何物をも生ぜざるものなれども、幹或は枝の、地中にありて、根の如く見ゆるものには、芽或は葉芽の、存することあるによりて、能く眞の根と區別することを得べし。

位置 液體 吸収 單根 複根
牛房 入參 葉芽 區別

第二十六課
山田長正の話

山田長正は、幼き時より、人なる望みを抱き、好みて軍法を學びたり。されど、其頃は、徳川幕府の時代にて、我が國よく治りて、戦争も無かりし時なれば、長正の志を伸ぶべき地なかりし故、遠く外國に遊びて、身をたてんことを思ひ立ちたり。

よりて、長正は、商人の船に乗り込みて、先づたいわん島に至り、それよりして、又しやむ國に入りしに、恰も此時、しやむ國は、四方の隣國より、兵を受け、戦争打ちつゞく折にて、中にも六昆國と云へるは、勢尤も強かりしかば、しやむ國王は、自ら兵をひきつれて、之を防ぎに出でたるに、長正、其兵の紀律無きを見て、其敗れんことを豫言せしが、果して六昆國に破られたり。



しやむ國王は、長正の、あらかじめ敗れんことを知りたるを聞きて、之を呼び出し、種々軍のことを尋ねしに、其答一々心にかなひしかば、直に、長正を大將となし、再び兵を出して、六昆國を防がせたり。長正は、奇計を用ひて、敵軍をつゝみうちしかば、六昆國の兵、大に敗れ、列を亂して逃げ去りしを、長正、都迄追ひつめつゝ、遂に其國王をとりこにせり。

これより、しやむ國の勢、俄に強く、諸國より、皆和睦を請ふに至りしかば、しやむ國王、大に長正の功を賞して、あんならと云へる、大名頭の如き役人となしたり。しやむ國王、年老いて後、自ら政を爲すに倦みて、其國の政は、悉く長正をしてかはりて行はしめしと云ふ。

長正 軍法 伸 隣國 六昆

紀律 豫言 奇計 大名頭

第二十七課

地球

吾等、若し百年前に、此世界の形は、如何なるものぞと問はば、誰も、測る可らざる大さの平面なりと答へしなる

べし。されど、今日に於ては、其形まろくして、恰も燈子の如くなることを知れり。

吾等は、何を以て、其まろきことを知りたるか。先づ、第一に、ある旅人、一つの場所より出立して、始終同じ向きに進みしに、遂に元の場所にかへりたり。若し、世界の形、平ならば、其進むに隨ひて、追々元の場所に遠ざかりて、再びかへること能はざるべし。第二には、吾等、若し高き處に昇りて、港に入り来る船を見んに、始めには、只其櫓の頂上を見るのみなれど、やうやく近づくにしがひて、遂に其船体を見得るならん。世界が、平なる物ならば、櫓を見たとおなじ時に、其船体をも見得べき筈なり。此等は、皆世界のまろき證據にして、此他にも、種種の證據あるなり。

倍、此世界は、其形まろくして、



球の如くなる故に、之を地球と云ひ、其表面は、陸と水とより成りて、水は、陸より廣きこと、ほとんど三倍なり。陸の、尤も大なる分ちを大陸と云ひて、此世界には、東大陸西大陸

及び濠太刺利大陸の三大陸あり。又、大陸の大なる分ちを大洲と云ひ、西大陸は、北亞米利加と南亞米利加との二大洲に分れ、東大陸は、亞細亞、亞非利加、歐羅巴の三大洲に分れ、濠太刺利大陸は、只濠太刺利の一大洲より成れり。

我が日本國は、東大陸の東方なる島國にして、亞細亞洲の中に在るなり。

地球 平面 櫓 船体 證據 表面

濠太刺利 亞細亞 歐羅巴

第二十八課

明治維新

明治は、今上天皇の御位に即かせ給ひし時に、定められたる年號なり。其元年に、征夷大將軍徳川慶喜、天下の政事を、盡く朝廷に返上して、天皇、新しく政事を、取らせらるゝに至れり。これを明治維新と云ふ。

昔、源賴朝が、鎌倉に幕府を立てしより、足利尊氏も、これにならひて、京都に幕府を置き、豊臣秀吉は、其職關白にして、征夷大將軍にはあらざりしが、天下の政事を取り行ひしは、足利氏におなじく、賴朝より此時に至る迄、其間、凡そ四百十餘年、其後、徳川家康、幕府を江戸に立てしより、明治迄は、凡そ二百六十餘年、前後合はせて六百七十餘年の間は、武家の天下となりて、朝廷

の御威光振はざりしが、今上天皇に至りて、天下の政事、再び朝廷に歸りたり。

それより、朝廷にては、猶朝命に従ひ奉らざるものをうち



平げ、二年にして、天下始めて治まれり。是より先き、都を江戸に遷し、名を東京と改め、諸大名の領地を、盡く朝廷に納めさせ、府と縣とを置きて、全國を治め給ふことゝなりぬ。

かくて、我が政府は、大に政事の改革を行はれ、大小の學校をおこして、農工商の別なく、皆これに入りて、種々の事を學び得しむるに至りしかば、人智大に進みたり。其後、外國の交際も、ますゝ、開け行きて、彼の國の學問工藝を取り、これを我が國に應用したれば、世は、日々開化におもむきて、遂に今日に至りたり。

吾等が、最も便利とする、汽車、汽船、郵便電信なども、多くは、皆維新の頃より出來しものにて、昔の人の、夢にも知らざる所なるべし。吾等は、此あり難き御代に生れながら、我が身を立て、我が國に盡す事無くて、あだに一生を送るが如き事あらば、誠に耻づべき事ならずや。

維新 年號 慶喜 朝命 改革

交際 工藝 應用 汽車 電信

第二十九課

君が御代

六百餘年の 昔より、武家に移りし 兵權も、天下の政事も、残りなく、一時に復る、君が御代。

盡せや、盡せ、君の爲め。

祝へや、いはへ、君が御代。

士農工商 さまざまに、品こそかはれ、大君に盡す心し 變らずば、國の固めと なりぬべし。

つくせや、つくせ、君の爲め。

祝へや、いはへ、君が御代。

千百萬の 兵船を、海に浮べて よせ來とも、大和心し、動かずば、あたも、敵も、恐れめや。

つくせや、つくせ、君の爲め。

祝へや、いはへ、君が御代。

國は、日の本、日の光、至らんきはみ 仰ぎ見よ。君は、萬世 一系の、わが大君ぞ しろしめす。つくせや、つくせ、君の爲め。

祝へや、いはへ、君が御代。

第三十課

國王の巡幸

ある賢き國王、其國內を巡回せらるゝついでに、小さき村に立ち寄られたれば、其村の人々は、皆限なく喜びて、家々に旗を立て、或は、花飾を設けて、國王を迎へ、又學校の生徒等は、皆道傍に列を作りて、君が代をことぶく唱歌を奏したり。

國王は、又學校に臨まれて、兒童等の學業の進歩を見んとおほせられたり。此時は、學校にて、恰も卒業試験の折なりしかば、國王は、先づ椅子に倚られて、卒業生徒の試験を傍觀ありしが、やがて、教師に向はれて、今われみづから、二三問を出して、生徒を試みる可しと云はれたり。

國王の前の机上には、多くの蜜柑を盆に積みて、差上げてありしが、王は、其一つを取り上げられ、「子供よ、これは、自然界中の、何界に属するものぞ」と問はれしに、一人の愛らしき小娘、「植物界に属します」と速に答へたり。

王、「さらば、これは、何界に」と、時計の金ぐさりを出しつゝ問はれしに、小娘、「礦物界に属します」と答へたれば、王は又、「娘よ、さらば、われは、何界に属するぞ」と問はれたり。

王は、小娘が、「動物に属します」と答ふるならんと思はれしに、小娘は、王を動物界に属すと申すは、誠に恐れありと思ひしか、顔を赤めて、お答へを申さざりき。王は、少しく打ち怠まれつつ、いとやはらかに、「娘よ、分りかねるか」と問はれしに、小娘は、やゝ勇氣づきて、「神の界に属します」と答へしかば、王は、目に涙をもたれ、小娘の頭を撫で、「ア、われ果して神の功德あるか」と言はれ、試験の後、此兒童等に、手づから卒業證書を與へられたりと云ふ。



王は、小娘が、「動物に属します」と答ふるならんと思はれしに、小娘は、王を動物界に属すと申すは、誠に恐れありと思ひしか、顔を赤めて、お答へを申さざりき。王は、少しく打ち怠まれつつ、いとやはらかに、「娘よ、分りかねるか」と問はれしに、小娘は、やゝ勇氣づきて、「神の界に属します」と答へしかば、王は、目に涙をもたれ、小娘の頭を撫で、「ア、われ果して神の功德あるか」と言はれ、試験の後、此兒童等に、手づから卒業證書を與へられたりと云ふ。

巡幸 花飾 道傍 學業 進步
卒業 傍觀 自然界 礦物
第三十一課

あふげばたふとし、
あふげば、たふとし、
教の庭にも、
思へば、いととし、
今こそ、わかれめ、
いざさらば、
わが師の恩、
はやいくとせ、
この年月、
いざさらば、

尋常小學讀本卷之七終

たかひにむつみし、
別るゝのちにも、
身を立て、名をあげ、
今こそ、わかれめ、
いざさらば、
日ごろの恩、
やよ語るな、
やよはけめよ、
まなびの恩、
つむ白雪、
ゆくとし月、
いざさらば、
今こそ、わかれめ、
いざさらば、